ラスト・ラン

作・北郷　遥斗

「ラスト・ラン」

目次

第1部

1．　中学生活の始まり ―― P 1
2．　部活スタート ―― P 3
3．　友達ができた ―― P 5
4．　タイムテスト ―― P 7
5．　僕が生まれた日 ―― P10
6．　父が戻ってきた ―― P12
7．　小学校の想い出 ―― P14
8．　哀しい転校 ―― P16
9．　孤独の学校生活 ―― P19
10．　部活やめたい ―― P21

第2部

1．　眠れない日々 ―― P23
2．　学校へ行きたくない ―― P25
3．　自分との闘い ―― P27
4．　学校との戦い ―― P29
5．　フリースクール ―― P31
6．　自分探しの旅 ―― P33
7．　つかの間の休息 ―― P35
8．　数々の挫折 ―― P38
9．　父の挑戦 ―― P40
10．　父との別れ ―― P42

第3部

1．　父のノート ―― P44
2．　カウンセリング ―― P46
3．　運命の出会い ―― P49
4．　自信への目覚め ―― P51
5．　親友との再会 ―― P53
6．　会社がつぶれた ―― P55
7．　学校へ戻ろう ―― P58
8．　父との約束 ―― P60
9．　母の故郷 ―― P62
10．　ラストラン ―― P64

第1部

1．中学生活の始まり

「本日入学された君たちは、これからの中学生活を大いに励んで、ぜひ充実した3年間を送って下さい。それが、私から君たちに贈る言葉です。」(拍手) 走翔(はやと)は、体育館最前列で校長先生の話を聞いていた。

そう、今日4月8日は北野中学校の入学式、愛沢走翔は新1年生になったのだ。『ようし、これから心機一転がんばるぞ。今度こそ、自分らしく、満足のいく学校生活を送ろう』走翔は、誰より強くそう自分に言い聞かせていた。

「では、新入生は、クラス担任の先生に続いて教室に戻って下さい。保護者の方は、そのまま体育館にお残り下さい。」司会の教頭先生が、マイクに向かってアナウンスした。走翔はちらほらと、横目で遠くの母に目をやりながら、先生の後を付いて教室に向った。

新1年生の教室は、体育館から渡り廊下を通って、向かい側の建物の1階に、手前からA組、B組、C組と並んでいた。走翔のクラスであるD組だけは、さらにその奥の建物に2年生の教室と並んで置かれていた。走翔の席はその廊下側の最前列、つまり、教室の前の入口のすぐ近くにあり、その後には、名前が五十音の順に、生徒が男女の区別なく並ぶことになっていた。

「皆、席に着いたかな。はい、ではこれから出席を取ります。呼ばれたら返事をして下さい。」 担任の中西礼子が、生徒たちに声を掛けた。

礼子は、地元国立大学を卒業して3年目。今年で25歳だ。成績優秀で教員試験に合格し、2年目から副担任に就き、今年から担任を任される様になった。

「愛沢走翔君」「は、はい」いきなり名前を呼ばれたため、走翔は少しあわてた。でも、礼子はそれには何も気に止めず、続けて名前を読み上げていった。「赤坂涼子さん」「はい」「井出智明君」「はい」「上野広君」「は

い」・・・「渡辺緑さん」「はい」「全員出席ですね」礼子が事務的に言い終えると、「これから1年、この29人で協力しながら、いい中学生活を送って行きましょう」と、生徒たちに微笑みながら語りかけた。

「走翔君て言うの？いい名前ね。私、涼子よ。よろしくね。」 次の部活紹介までの休み時間に、すぐ後ろの涼子が気さくに話しかけてきた。「あ、よろしく。」走翔は視線を向けないまま、ぶっきらぼうに返事をした。「部活はどうするの？」「まだ決めてない」「何が好き？体育系？、文科系？」「だから分かんないってば」走翔は、ようやく視線を涼子に向けた。目鼻立ちがしっかりして、女子としては少し大柄な、物おじしない、積極的なタイプの女の子だった。小柄できゃしゃな走翔とはだいぶん違うタイプだった。「私ね、バドミントン部に入ろうと思うの。」「あ、そう」「走翔君も一緒にどう？」「やだよ。」「何で？」「だってやった事ないもん」「大丈夫よ。私だってやった事ないのよ。」「そ、そうなの？」 走翔は少し意外そうに聞いた。「そう、だから走翔君もどう？」「いや、でもいろいろ聞いてみてから考える」「そうか、そうよね。私も次の説明会でちゃんと聞いてから決めようかな？」「そうだよ、その方がいいよ。」「分かった」走翔は、内心声を掛けられた事にほっとしていた。特に涼子だからという事ではない。見渡したところ、D組には同じ小学校からの知っている顔は少なく、いてもまともに話した事もなく、まして「友達」と呼べる子は皆無だった。内気で、人見知りの性格の走翔にとっては、そこは、まさに生きた心地がしないほど、緊張と不安の時間を過していたのだ。

「さて、この時間は中学生活で大切な活動の一つでもある部活動についての説明と紹介をします。皆さん、よく聞いて、今月中に希望のクラブに入るようにして下さい。」礼子が、休憩時間が終わった教室で生徒たちに促した。

2. 部活スタート

「新入生の皆さん、入学おめでとうございます。僕たちは野球部のメンバーです。北野中野球部は、昨年県地区大会でベスト8に入りました。今年は、地区大会優勝が目標です。ぜひ、皆さんも野球部に入って、共に地区大会優勝を目指しましょう！」 まずD組の教室に入って来たのは、野球部の2、3年生のメンバーだった。走翔は、正直いって野球を知らなかったので、全く感心がなかったが、クラスの他のメンバーは、熱心に関心を寄せている者が多かった。次に教室に入ってきたのはバドミントン部だった。『さっき、あの娘が言ってた部活だ』走翔は内心注目していたが、涼子にその気があると思われるのがいやで、わざと顔をそむけ、無関心を装っていた。「我がバドミントン部は、よく思われる様な『羽根つき』とは全く違い、かなりハードな格闘技です。」3年男子の部長が最後を力強く締めくくると、走翔は一瞬『ドキッ』としながら、彼の顔を横目で見やった。『へー、そうなんだ。結構良さそうじゃん』走翔はまんざらでもなさそうに、皆に配られた部活一覧表にチェックを入れた。体育会系の最後は陸上部だった。「陸上と一口に言っても様々な競技があります。短距離から長距離トラック、ロードレース、走り幅跳び、走り高跳び等のフィールド競技や、砲丸投げ等の投てき競技など様々です。ですが、それらの中で自分に合った好きな競技を選ぶことができ、正直言って実力はまだまだですが、楽しくスポーツを楽しむ事ができるクラブです。陸上は誰と戦うのでもなく、自分と戦う競技です。でもそれは、努力した分は必ず結果に出るスポーツでもあります。皆さん、地味だけど奥の深い陸上部にぜひ入部して下さい。そして、一緒に自分の可能性にチャレンジしてみましょう」最後に部長のスピーチが終わった頃には、走翔はすっかりひき付けられていた。『これかもしれない。意外だったけど、これなら何だか頑張れそうだ』走翔は、父と始めた『朝練』の事とだぶらせていた。

走翔は、小学校の頃より唯一と言っていい、自信を持っている事があっ

た。それは4年の頃より父と始めた早朝マラソンだった。とは言っても、せいぜい3km程の家の周りを走るだけで、時々さぼって行かない時もあるけど、朝、いつも会うウォーキングのおばさんに「お兄ちゃん、いつも頑張ってるね。最近、体、引き締まって来たよ」なんて言われるようになると密かにうれしい気分になっていた。そうして、走翔は陸上部に入った。

しかしそれは、くしくも父との朝練の終わりを意味していた。なぜなら、部活の朝練が、走翔を支配する事になるからだ。「もう、部活の朝練が毎日あるから、父さんと朝、走れなくなったわ。」と、走翔が申し訳なさそうに父に言うと、父は「良かったな。これで走翔も一人立ちだ、友達いっぱいできるといいな」と、笑顔で返してくれた。それで走翔は、いくらか救われた気になれた。

部活の練習は朝だけでなく、もちろん放課後も、そして土、日、祝日も毎日のように行われた。新入生は学校の周りのランニングや、校舎裏での筋トレ。雨の日は校舎の階段駆け上りや、廊下でのストレッチなど、身体能力を高めるためのメニューばかりで、競技に関する事は一切なく、それらは2、3年生だけのものとなっていた。

「何だか毎日つまんねーな」 走翔は剛志に声を掛けられた。身長が同じ位なので、いつも部活の際、組まされる相手だからだ。「そうだね」走翔は何となく合わせた。正直、走翔には全てが初めてなだけに、今のこれがどうなのかなど、全く分からなかった。

ただ、剛志は既に小学生の頃から足が速く、何度も競技会に出てる『経験者』なだけに、ずいぶん物足りなく感じているに違いない。走翔は、そう想像する事が精一杯だった。でも走翔にもそれなりの夢があった。それは、いつか父から聞いたホノルルマラソンに、父と一緒に出る事だった。

3. 友達ができた

走翔は、毎日毎日、来る日も来る日も、部活に明け暮れた。朝はまだ夜も明け切らない内から起きて、母の作ってくれた朝食用の弁当を掴み取るように持って、午前5時半にはもう家を出た。夜は夜で授業が終わるや否や、グランドに駆け出し、真っ直ぐに部室に向った。

放課後の練習は、陽が落ちてもまだ続き、家に帰り着くのはいつも夜の8時を回った。それでも走翔は、何か部活を通じて答えを見つけ出そうとするかの様に、必死に耐え忍んでいるという感じだった。

6月に入ったある日、「父さん新しい靴を買って。もうボロボロで履けないから」と走翔とが訴えるようにねだって来た時、父は、4月に買い与えたばかりのシューズが、つま先はめくれて口が開いているわ、両側の指の当たる所はやぶれて穴が開いているわ、かかとは斜めにすり減って傾いているわで、もう靴の体をなしてないのに仰天した。『たった2ケ月でこんなにもなるものか。相当過酷だったんだろうな。でもこの努力は必ず報われるから』と、心の中で息子を讃えた。

そんな中でも、走翔には一つうれしい事が起こっていた。それは、心を許せそうな友達ができた事だ。走翔は元来口べたで、誰とでもすぐに仲良くなれるというタイプではない。小学生の頃から、付き合える友達はごく限られていた。しかも中学校に上がってから、同級生の多くは別の中学校区になってしまい、走翔の話せる友人は誰もいなくなってしまった。それが、中学生になって初めて出来たのだった。それは、同じ陸上部の1年生だった。いや、いつもよく練習を組まされた剛志ではない。好太という別のクラスの男の子だ。好太もどうやら同じ小学校らしかったが、顔も名前も知らなかった。当然、6年間ずっと同じクラスになった事はない。ただ、陸上部は共に初心者だという事が共通で、部活の休憩時間などに、よく隣り合せになる事が多かった。他の連中はそれぞれ得意な競技や、レベルに合せて共通の話題毎に集まりがちで、二人はいつも取り残されてしまうから

だ。

「走翔は映画とか観るの？」ある時好太が話し掛けてきた。「観るけど。俺、小学4年の時、映画鑑賞クラブに入ってたし」「そうなんだ。どんな映画が好き？」「う～ん、ディズニーとか、あとジブリ」「いや俺も。同じだね。今度一緒に観に行かない？学校休みの日に」「いや～、でも部活があるし・・・」「雨の日なら部活も休みだよ」「そうか・・・、まぁいいけど」「よし決まり、きっとだよ。週末雨降らないかなぁ」

その日の週末、土曜日は朝から大雨で、案の定、部活連絡網で午前6時には中止の電話を母が取っていた。好太との待ち合せは9時に近くの駅前だったので、ゆっくり二度寝をしてから、いつものように朝食はとらずに家を出た。母には、部活の買い物とだけ言っておいた。歩いて15分程の駅に、9時10分前に着いた時、もう好太は来ていた。「やあ、さっそく雨降ったね」「ああ」走翔は傘をしまいながら短く答えた。靴やズボンのすそは雨で色が変わる程濡れていた。それを気にするそぶりの走翔に、「大丈夫か？結構ひでえな。俺ん家はこの駅のすぐ裏なんで、大した事なかったけど」「大丈夫、大丈夫。お前とこ、この近くか？いいな。じゃ行くか？」二人は電車でふた駅目にある『シネコン』に向った。

二人は、『あらしの夜に』の上映中は一言も話しをしなかったが、お互いに存在はすごく感じて合っていた。

「面白かったな」映画館を出て、好太が先に切り出した。「うん、でも俺はちょっと悲しかった。でも、最後はよかった」「なあ走翔、俺、陸上部に走翔がいてくれて良かったよ」「俺も」「これからもずっと友達でいような」「そうだな」その会話は、各々が信頼を確かめ合うにはそれで十分だった。

4. タイムテスト

7月に入って、8月の地区ジュニア大会予選のための記録会が開かれることになった。第1週の日曜日、午前8時には部員たちはすでに男女に分かれて、学校のグランドに集まっていた。

「はーい、集合！皆来てるかな。」男子陸上部顧問の大きな声が響いた。「では、学年毎に整列！番号!!」「1」「2」「3」「4」・・・「18」全員が点呼した。「よーし、全員揃ってるな。では、今から県大会に向けての地区予選のための記録選考会を行う。種目は100m、200m、800m、1500m、110mハードル、走り幅跳び、走り高跳び、砲丸投げだ。学年毎にローテーションを組んで交代で行っていく。各競技終了毎に20～30分の休憩を入れ、1500mは最後に全員一斉で行う。いいな」「はい」「終了は午後4時30分の予定だ。では、精一杯頑張るように」顧問がてきぱきと説明すると、全員グラウンドに散らばり、いつもの柔軟体操を始めた。走翔はまた、いつものように剛志とペアを組んでストレッチを行っていた。

「なあ、走翔。お前何に出るんだよ」「何って？」「決まってるだろ。種目だよ」「そんなのまだ決めてないよ」「そらそうだな。お前は初心者だし、何させても遅せーし、出れるものないんじゃねーか？」走翔は黙っていた。「剛志は何に出るんだよ」必死で話を質問で変えようと聞いてみた。「俺か？俺はもちろん100mと800m走だ。花形だしな。上級生ですらまだ遅せーやついるぜ」「ふーん、すげーな」走翔は矛先をかわすために感心して見せた。「それにしても、お前とあの好太だけは何やっても無理だな。まるで陸上部のお荷物だぜ。」それでも剛志は、何の遠慮もなく毒付いて見せた。「よーし、集合。それでは今から競技を開始する。3年生はレース、2年生はフィールド、1年生は投てきから開始する。記録は所定の用紙に競技のない者が交代で付けるように。ではみんな位置に付け」顧問が指示すると、一斉に部員の間に緊張が高まった。

1年生は全員砲丸投げからのスタートだった。あまりにも地味で人気の

ない競技だけに、皆、熱が入っていない様子だった。それでも、事前に受けた指導の通りにプレーし、たいていの部員は平均そこそこの記録を出していた。しかし、やはり走翔と好太だけは、全く目も開けられない程の始末で、散々たる結果だった。フィールド、レース競技に移っても同じだった。二人の成績は同じ学年でもへたをすれば、どれもトップの半分くらいの成績になっていた。

昼休み、走翔と好太は一緒にパンをかじっていた。実はその日、学校に来る途中に偶然コンビニで二人は顔を合せていた。そこで、「走翔か？」好太が先に声を掛けた。「ああ」走翔は短く返した。「何だか気重いな」好太が吐き出すように言った。「何が？」「今日の記録会だよ。俺たち何にもできねーし。」「そうだな」その時の会話はそれだけだった。二人はその後無言で学校まで二人で歩いた。

「よ！お二人さん、似た者同志はやっぱり仲がいいよなー」ふいに剛志が近寄ってきてからかった。「午後はいよいよトラック競技だぜ、お二人さんの走りっぷりをとくと見せてもらうとしますか？」「あははは」剛志のちょっかいを聞いて、他の連中も声を上げて笑いを投げてきた。走翔と好太は顔を合せることもなく、うつむいたまま静かに耐えていた。

「よーし、みんな集合。今日はよく頑張ったな。それでは今日の成績と種目出場者の発表を行う」顧問が部員に向かって言った。

「まずはフィールドから。幅跳び、３年近藤」「はい」「２年黒木」「はい」・・・「よし。次、レース、８００ｍ、３年竹下」「はい」「１年岡田」「はい」「剛志だ！あいつすげーな」部員の間でどよめきが起きた。「・・・１００ｍ、３年米田」「はい」「２年髙橋」「はい」「１年岡田」「はい」「まただよ。どうなってんだ？あいつ！」剛志は、その他にも１１０ｍハードルと、１人３種目に出場する事になった。それは上級生にもなく、北野中陸上部でたった１人の快挙であった。

「あと、呼ばれていない者は手を挙げて」顧問が聞いた時、二人の右手

が静かに上がった。走翔と好太だった。「そうか、二人は砲丸投げだ、いいな。では、解散」あっさりとした顧問の言葉でその日の記録会は終った。

5. 僕が生まれた日

走翔は1989年、つまり平成元年3月3日に、母の実家のある北海道蘭越町で生まれた。父は毎日仕事で忙しく、しかも出張で、月に半分も自宅に戻らない事も多いので、母は里帰りをして出産に備えていたのだった。蘭越町は札幌より南西に約70km、スキーや温泉で有名なニセコ連山の南側に位置し、北海道の中でも有数な豪雪地だが、自然豊かな景色のいい、とてもいい街だった。

ただ、走翔にとっては、生まれてから3ヶ月で父の待つ自宅に戻り、当然ながら街の記憶はほとんどない。しかも、その後まだ一度も訪れることはなかったので、その街の事は未だに何も知らなかった。

ただ、父からはその街の様子や素晴らしさを良く聞かされていたし、生まれた後、母に抱かれて撮った写真には、少し街の風景が写っていたりしたので、いくらかは想像してみる事ができた。『大きくなったら一緒に羊蹄山に登ろう』が、父の口癖だった。「大きくなったらっていつ？」「それはな、走翔が中学生になったらだ」「その時は何年？」「その時か、その時はな、今、6才だから・・・2001年だ。21世紀だな。丁度いい、千年紀の最初の記念の年だ。なあ、行こう。絶対に行こう」走翔は、父が一人で興奮していたのを憶えていた。

そして、その年が今だ。しかし、まだその約束は実現していない。でも、走翔は別に気にしていなかった。父の仕事は貿易関係で、毎日帰宅は午前0時を超えていた。朝も午前5時には起きて、自宅から東京の会社まで約2時間かけて、満員電車に押し潰されながら通っていた。でも、今でこそ、まだそれでもましな方で、走翔の幼いの頃は、まさにバブル経済の絶頂期。空前の好景気の時代で、父は、会社に寝泊りする事もざらで、その上、国内外問わず出張が多く、最近、母に聞いた話だが、2ヶ月、3ヶ月家に戻らない事もしょっちゅうだった。

確かに、僕には小学校に上がる頃までの父の記憶はあまりない。今か

ら思えば、いつも哀しそうにしていた母の顔しか記憶にないのだ。その後、そのバブルがはじけ、父と顔を合わす事が増え、同時に、母の顔にも少しずつ笑顔が戻って来たような気がする。

父と母は、父が学生時代に初めてスキー旅行でニセコに行った時、泊まったペンションで知り合ったそうだ。母はその時、そのペンションでまかないのアルバイトをしていた。父はその時、その大自然に囲まれ、日本の他の、どの場所でも見られないニセコの街と、そして、そこで働く母を同時に一目で好きになったらしい。それ以来、父は、毎年夏と冬には必ず訪れる事になった。冬はもちろんスキー、夏には登山やサイクリングなどをして過ごした。母は当時高校生だったが、夏休みと北海道の長い冬休みには、必ず同じペンションでアルバイトをする事になっていたし、休みの日や、空いた時間には、父と一緒にスキーをしたり、温泉に行ったりしたそうだ。どうやら、母がバイトをしていたそのペンションは、母の親戚に当たるらしく、その噂はまもなく母の両親にも知るところとなるが、当時はまだ、特に何も言われず、見て見ぬふりをされていたみたいだ。年に2回と言っても、当時学生だった父にとっては、旅費も宿泊代も馬鹿にならず、アルバイトをして貯めたり、普通列車を乗り継いだり、船で2日、3日と掛けて出掛けてたらしい。

それは、父が大学を出て東京の会社に就職してからも続いたが、仕事が忙しくなるにつれ困難になり、ついには結婚を決断したそうだ。当初、母の両親は、娘を遠い内地に出す事にとまどってたらしいが、母は、既にとうの前からそのつもりだったらしく、遂には折れ、許す事になった。父、26歳、母24歳だった。そしてしばらくして僕が生まれる事になるが、母の苦悩も同時に始まった。

6．父が戻ってきた

間もなくバブルが始まり、父の仕事は極限を極め、走翔は、母子家庭同然の生活の中にいた。母はいつも辛い表情をしてたし、口数も少なかった。北海道から出て来て、父の実家の近くの賃貸マンションに住んでいたが、近くに友人もなく、かと言って安易に父の両親に甘える事も出来ず、ただひたすら、朝早くから夜遅くまで、走翔の世話と家事をこなしながら、父のいない生活に耐えていたに違いない。時には、遅く帰った父と言い争ってる事も何度かあった。ある時に両親のけんかの中で、僕の名前が出てきた時にはビクッとした。何だか、僕が原因でこんな事になったようで、その日は不安で寝られなかった事を憶えている。『このままでは、僕たちはどうにかなってしまうんじゃないか』子供心にそう考えると、いてもたってもいられなくなった。そんな状況がしばらく続き、遂に母が、体調を崩し病院に通うようになって、いよいよ重大な事になりかけた時、幸か不幸かバブルが崩壊した。父の会社の業務が激減し、多数の社員はリストラで、退職や移動になった。父は、まだ若かったので「クビ」にはならなかったが、給料はこれまでの半分近くに減り、家も賃貸マンションから、木造のアパートに引越す事になった。それでも、これまでと比べものにならない程、家族でいられる時間が沢山できた事が、母と僕にとっては何よりも幸せな事だった。

父は、最初は会社がなくなってしまうのではないかと、途方に暮れていたが、やがて、家族の絆を取り戻せた事に気付き、「命拾いした、これは神様がくれたプレゼントだ」と涙をこらえながら話した。それから僕たちは、失われた時間を取り戻すかのようにして過した。母はパートに出るようになったけど、休日には三人で、必ずと言っていい程、買い物に出掛け、食事をして過ごすようになった。また、父は、僕が小学校に上がるようになってから、よくキャンプにつれて行ってくれた。僕に兄弟がいない事もあるのだろう、そこではいろんな事を教えてくれた。

父はよく「父さんは、子供の頃ボーイスカウトをやってたから、野外活動

は得意なんだ」と言って、海に行っては釣りや海水浴、山に行っては登山や昆虫採集。そして夜には星空観察や花火をしたり、温泉に入ったりした。そのうちテントの建て方、火のおこし方、ごはんの炊き方までいろんな事を体験する事ができ、そこで僕は、自然の素晴らしさ、生きる事の素晴らしさを、知らず知らずの内に体に蓄積させていく事になった。時には、母も一緒に行った事もあったが、僕は、いつも父と行動を共にした。そして、僕が高学年になる頃には、母は殆ど来なくなり、父と二人だけの冒険が続いた。

また、父とよく映画にも観に行った。父は、たいがい僕が観たいものに付き合ってくれた。それは多くは、アニメだったり、ディズニーだったりしたが、一緒に泣いたり、笑ったり、おどろいたり、本当に父は兄弟のように付き合ってくれ、僕にとっては兄のようにさえ見えた。

この頃が、僕たち家族三人にとって一番おだやかで、お互いに信頼し合えた幸せな時期だったかも知れない。しかし、そんな日々もそう長くは続かなかった。遂に、父の会社が倒産してしまったのだ。バブル崩壊後もなんとか持ち耐えてはいたものの、長びく景気低迷は一向に回復の兆しを見せず、当時の過剰な不動産投資のツケは、いよいよ屋台骨までむしばみ始め、遂に、外資系の会社に事業譲渡される事になってしまったのだ。

社員の多くは引継がれる事にはなったが、企業風土も、勤務条件も大きく変わる事に不安を覚え、父は辞める事を決断したのだった。「これからどうして生活していく気なの？」母は父に言い寄ったが、「何とかなる」の一点張りで、すっかり諦めた様子だった。それはまさに僕にとっても大きな事件となった。

7.小学校の想い出

走翔はその晩、なかなか眠れないでいた。明日はいよいよ小学校の入学式だった。居間の壁際には、おじいちゃんから買ってもらった、真っさらな学習机が置いてあり、その前の椅子の上には、明日入学式で着ていく真っさらな洋服がきちんと畳んで乗せてあった。それは、ばあちゃんから買ってもらったものだった。そして、机の横のホックには、ピカピカの青色ランドセルが掛かってあり、それは、先月父と、一緒に街のデパートに買いに行った時、走翔が選んだ色だった。父は最初、「皆んなは黒だから、黒がいいんじゃないか？」と言ったが、走翔はそれを頑に拒み、どうしても譲らなかった色だった。父は内心、子供ながらにその自己主張の強さを認めていた。母は今日、美容院へ行って髪を整えてきた。準備万端。あとは明日の朝を待つだけとなっていた。

走翔にとって、小学校に入るのは何よりも楽しみな事だった。2年前から幼稚園には通っていたが、いつも一緒に遊ぶ近所の子供たちは、別々の保育園などに通っていて、それが今度、一緒の学校に通える事になったからだ。走翔には兄弟はいなかった。それだけに、今度からは毎日、仲良しの友達と一日中過せる事は嬉しかったし、そして何よりも、また多くの友達が出来ることは楽しみであった。

走翔の布団は今まで通り、居間に接した和室に敷かれていた。隣には、それも今まで通り、母の布団も敷かれていたが、その母は、まだ隣の居間で起きてるようだった。父はまた、今まで通りまだ帰って来ていない。

朝になって母は走翔を起こしに来た。が、走翔はとうに目覚めていた。ただ、いつも通り母が起こしてくれるのを待っていたのだ。母に着替えを手伝ってもらっていると『ピンポーン』と、玄関のインターンホーンが鳴った。母が出ると、近所の一平君とそのお母さんが立っていた。「おはようございます」いち早く一平君の母があいさつをすませると、「ちょっと早かったかしら」と続けて気遣った。

母が、「いいえ、そんな事は。今、出るところです。ちょっと待って下さい」というと、「走翔、一平君とお母さんが迎えに来てくれたわよ。早く出掛ける用意して」と、声を掛けた。

「いよいよですね。」「ほんと、あっという間で」「これからもどうぞよろしく」「いいえ、こちらこそ」などと母たちは歩きながら会話をしていた。走翔と一平は、その前の方をじゃれながら走ったり、止まったりしながら、小学校までの15分程の時間を過ごしていた。「これ、真っすぐに歩かないと危ないよ」母たちに注意されると、その時だけはおとなしくしても、また直ぐに元に戻った。その内「愛沢さん、おはようございます」と、これも仲良しの愛美ちゃんのお母さんが声を掛けて来た。「あ、おはようございます」と母があいさつを返す間に、もう子供たち三人は、前方に見えた小学校の門に向かって一斉に駆け出していた。

走翔は、校長先生の話の間中、そわそわしていた。隣の子供に顔を向けたり、後を振り向いて母の方に目をやったり、母はその度に『前を向きなさい』と口ぱくと身振りで注意を送った。式が終わって、それぞれのクラスの教室に移る時、廊下に名簿が張り出してあった。見ると、走翔は仲良しの一平と愛美と同じクラスになっていた。「ほれ、走翔。一平君と愛美ちゃんと同じクラスだって」走翔の手を取っていた母が言うと、「同じクラスって？」と聞き返した。「あのね。一緒にお勉強できるっていう事よ」母が分かり易く説明してくれた。「やったー！」走翔はますます嬉しくなっていた。

教室では、担任の先生のあいさつがあり、クラス全員の名前が呼ばれた。教科書が配られ、「ではみなさん、一年間楽しくお勉強して行きましょう」先生がクラス全員に声を掛けると、子供たちは一斉に立ち上がり、「先生、皆さん、さようなら」と、先に教えてもらった通りに大きな声であいさつを終え、教室の後ろに立って見ていたお母さんたちと家路に着いた。

8.哀しい転校

走翔と一平と愛美は本当に仲がよかった。学校へ行く時も帰る時も、放課後も休みの日も、いつも一緒だった。そして、学校から帰るとランドセルを玄関先に放り投げ、宿題もせずすぐに外に駆け出して、日が暮れて、母が夕飯時に呼びに来るまで公園等で遊び続けていた。「早く宿題しなさい」と、走翔は母にいつも言われていた。そんな三人に影響されて、他の子供たちも吸い寄せられるように友達になり、仲間が増えていった。

また、お互いの家に遊びに来ることもしょっちゅうだった。雨の日曜日などは順番に、それぞれの家に行ってゲームをしたり、テレビを見たりしてよく遊んだ。誕生日には、家族だけでなく、友達もお祝いのパーティーに入り、プレゼントをあげたりし合った。学年が進むにつれ、誰かが習い事をし出したら他の子も行きたがり、新しい靴を買ってもらったと聞けば皆んな欲しがった。宿題をする時も、プールへ行く時も皆んな一緒だったし、遠足に持っていくおやつも、皆んな同じ物を買いに行った。高学年になってクラブ活動をするようになっても、男女が別々の運動系ではなく、皆んな揃って映画鑑賞部に入った。本当に皆んな兄弟のように、いや、それ以上に強い絆に結ばれていた。「中学校へも皆んなで一緒に行こうね。高校も皆んなで同じ所へ行こうね」と三人は固い約束をした。

そんな小学校6年の夏、突然あの衝撃が襲った。「走翔、驚かないで聞いてくれ。母さんとも話し合ったんだけど、今度、家を引越す事になった。父さんの会社がなくなってしまってな。父さんは仕事を変わらないといけなくなったんだ。新しい会社は東京にあって、早い日は朝7時から仕事だから、この家からは通えなくなるし、給料も減って大変だから、その会社の近くにある家に住む事にしたんだ。だから、走翔の学校も変わらないといけなくなる」「え？なんで？そんなの嫌だ。友達と別れるなんて、絶対に嫌だ」「だめなんだ。そこからは今の学校に通う事はできないし、お前一人、この家に残すことも無理なんだ」父はできるだけ丁寧に話そうとした。それ

は、走翔も十分に理解できていた。「僕、約束したんだ。皆んなと同じ中学校に通って、同じ高校に行くって」走翔の目にはいっぱい涙があふれ、泣きじゃくっていた。「ごめん。走翔」母はそうなぐさめるのがやっとで、母もまた泣いていた。

全てがうまく行っていると思っていた。父の仕事も落ち着き、家にいる時間も増え、マンションからアパートに移って、家は少し狭くなったけど、母に笑顔も戻り、大好きな友達と毎日を過ごす事ができ、勉強も遊びも充実していた。これ以上の幸せはないと、子供心に感じていた。それがこんな事になってしまって。走翔は今、不安と哀しみの中にいた。「走翔、確かに今の友達と一緒に卒業できないし、もう同じ中学校に通う事が出来ないかも知れないけど、同じ高校に行く事はできるぞ。高校は好きな所を選ぶ事ができるし、その頃はお前も一人で暮らせるようにやってるかも知れない。な、それで分かってくれないか」走翔はしばらく黙ってた後、小さくうなづいた。「すまんな。もう二度とお前を悲しませたりはしない」そう言い切ると父も涙声になった。

次の日の朝、いつも通り一平たちが、登校のため走翔を迎えに来た。走翔の冴えない表情に気付き、どうしたのかと言う尋ねに、「いや別に」と繰り返したが、「俺らは親友だろ。何でも言えよ」の一言についに走翔も口を開いた。みんなショックを受けていた。学校に着いてもほとんどしゃべらなかった。でも、帰りに一平が「それでも俺らは親友だ。高校で待ってる。それまでのお別れだ。引越しの日には見送りに行くよ」「私も」愛美も続いた。「でもさ、修学旅行一緒に行けないんだな」「いいわ、ちゃんとおみやげ買ってきてあげる」そう言うと、三人はまた黙ったまま公園のベンチで沈む太陽を見つめていた。

そして、ついにその日がやってきた。荷造りを終えたダンボール箱を、引越し業者の人が手際よくトラックに積み込んで行った。一平や愛美だけでなく、クラスやクラブの多くの友達が走翔を見送りに来ていた。「じゃあな、

元気で。手紙くれよ」「ああ、書くよ。ありがとう」「私も手紙書くわ」「ありがとう」短い会話でも気持ちは十分伝わっていた。「また遊びに来いよ」「絶対来る」トラックに続いて、走翔を乗せた車も小さくなって行った。

９. 孤独の学校生活

二学期が始まって、走翔は新しい学校での始業式の日を迎えた。転校先へは夏休みの間、もう2回程、母と一緒に来ていて、行き方も、建物の場所も分かっていた。走翔は事前に言われていた通り、校門をくぐって真っすぐ職員室にいる担任のところへ向かった。「お、走翔、おはよう」新しい担任はあえて明るく声を掛けた。「おはようございます」走翔はいくぶん力なく答えた。「どうした？元気ないぞ。今日からまた新しいスタートだ。卒業まで、もうすぐだからな。心機一転がんばろう」担任はポンと走翔の肩をたたいた。「はい」「よし、じゃ教室に行こうか」と、同時に始業のチャイムが鳴った。

教室では、初めて走翔と顔を合わす生徒たちが、いろんな方向から走翔に視線を送っていた。「ようし、みんなおはよう。久しぶりだな。夏休みの宿題はちゃんとやって来たか？あとでしっかり確めるからな。今日はみんなに新しい仲間を紹介する。今日からこの学校でみんなと一緒に勉強する事になった愛沢走翔君だ。みんなよろしく頼むな」「はーい」「よし、じゃ走翔からも一言あいさつしてくれるかな？」「今日から転校しました愛沢走翔です。よろしくお願いします」走翔はそれでもずいぶん長い時間に感じた。そして担任に促がされ、一番前の席に着いた。

休み時間になって、何人かが走翔の席に近付いて来た。「ねぇ君、どこから来たの？」「誕生日はいつ？」「趣味はなに？」走翔が答えを言う前に次々と聞いて来た。「３月３日」それだけ言うのが精一杯だった。「３月３日だって」「ひな祭りだ」「女の日だ」「あははは」みんなにからかうように言われ、走翔はショックを受けた。『今までそんな事言われた事ない！』走翔は心の中で叫んだ。

６年生のクラスは、たいがい5年からの持ち上がりで、しかも、二学期となると、クラスメイト同士の理解や絆はかなり深まっており、走翔にとってはこの時期、彼らとのコミュニケーションギャップは相当なものだった。言

葉の分からない、見ず知らずの外国に一人入ったようなもので、その孤独感というものは、言葉で表せないほどのストレスがあった。

家にいても、以前とは別人のように無口になった走翔に、父も母も心を悩ませていた。走翔は、前の学校の友達の事がずっと頭から離れなかった。彼らとの当時の思い出ばかり追いかけては、憂いに浸る毎日だった。

「どうしたらいいんでしょう？」夜、たまりかねて母は、夕食を終えた父に問いかけた。「そうだな。しばらく見守るしかないだろう」「何か別に打ち込めることがあればいいんでしょうけど？」「何かと言ってもなあ。」それっきり二人とも黙ってしまった。「また、朝、一緒に走ってみるか？」父が思い出したように言った。父は、昔、部活でよく走らされていて、その時はこんなつまらないものはないって思っていたが、以前、走翔と走り始めた時に意外と楽しめるものだと感じていた。それから、しばらく経って自然としなくなったんだけれども。「あなた、朝早いのに大丈夫？」と、心配する母に「週３日は遅番だし、その時なら小一時間位は作れそうだ。ちょうど、僕もまた走ろうと考えてた事だし」と答えた。「まあ、とにかく明日でも走翔に聞いてみるよ」「少しでも前向きになってくれればいいんだけど？」まだ母は、それでも不安を隠しきれないでいた。

次の日の夜、仕事から早く戻った父は、夕食の時、走翔に昨日の話を持ち出してみた。走翔はしばらく考えて後、「やってみようかな」とつぶやいた。嬉しい答えを聞いた父母は、わずかに動き出そうとするチャンスにほっとすると同時に、このまま、うまく行ってほしいと強く願った。「そうか。じゃ明日からな。朝6時に起きるから」父は、走翔の気持ちが変わらない内にとすばやく決めると、「よし、じゃ今日は早く寝ようと箸を置いた。それから、父が早番の日を除き、その『朝練』はスタートした。

10. 部活やめたい

『朝練』はその後も続いていた。寒くなってからは休む日も多くなったが、それでも嫌ではなかった。そのしんどさの中に何か見つけられるような気がした。父は「走っていて苦しいときは上に向かって登っているとき、逆に楽だと感じるときは落ちている時だ。苦しい時こそ希望が持てる」と励ましてくれた。また、「走りは決して時と場所を選ばない。全ての人に公平にチャンスがある。それすらも逃す人なら、決して幸せを手にすることはできない」と教えてくれた。正直それをあまり実感する事はなかったけど、でもその事の意味は分かるような気がした。

とにかく、そのようにして半年が過ぎ、走翔はいよいよ卒業の日を迎えた。クラスではいくらか話せる友達もいたが、でも、一平や愛美のように仲良くなるにはほど遠かった。この正月には、前の学校のたくさんの友達から年賀状が来た。担任の先生からも来ていた。ハガキには修学旅行の思い出や、『また、会おう』など書いてあった。一平からは、『21世紀あけましておめでとう。この記念すべき年に大いに飛躍しよう』と。愛美からは、『走翔君、修学旅行のおみやげ買って来たよ』と書いてあった。走翔は、自分の事が忘れられていない事が非常に嬉しかった。先生からも『走翔君と勉強した事はいつまでも忘れない』と書いてくれた。胸にじーんと来たが、一方では『これからはもう中学生、前を、向いてがんばらないと』と自分に言い聞かせた。

中学校では、小学校での知り合いは殆ど別の校区になり、多くが初めての生徒ばかりだった。だから、それはそれでまた、一から気持ちを切替えてやるには区切りにしやすかった。そして、自分に挑戦させるためにこの陸上部に入ったのだ。しかしそれも長くは続かなかった。記録会のあと、上級生だけでなく、同級生からもからかわれる事が多くなった。「こいつ、足遅せーくせに何で陸上部やってんだ？」「『はやと』じゃなく『おそと』じゃん」、「いや『走る』じゃなく『歩く』じゃないか？」「あははは」一斉に全員が

笑い出した。そして、そんな「いじめ」の対象は好太にも向けられていた。二人は、陸上部の『お荷物』とされ、『早くやめろ』とさえ言われ続けた。そんな事を、顧問の先生も薄々気付いてはいたが、目に見えて暴力的な事がある訳でもなく、一種の『激励』だと、勝手に都合よく決め付けて、見て見ぬふりをした。

そうこうしていると夏休みに入り、秋の県大会に向けた強化体制が組まれ、男女合同で、レギュラー組と、走翔たち補欠組に分かれて練習する事になり、『いじめ』は一担下火になった。補欠組は、毎日、グランド整備とランニングと筋トレばかりだったが、走翔にとってはその方がかえって集中でき、父が言うような本来の「走り」を楽しめていた。ただ、学校での部活とは、ただ『勝つ』ためのものであり、決して『楽しむ』ためではないと言う事も気付き始めていた。そんなある日、走翔は「部活をやめたい」と、父に打ち明けた。

「どうして？」父は特に驚くでもなく、逆に心配そうに聞き返した。最初は、「何となく」などでごまかしていたが、その内「足遅いからいつもビリだし」と、本音をもらした。父は、何となく走翔の葛藤は想像できた。子供では、時々自分が打ち込んでいる事の本当の意味を知る由もない。だから、そこを大人が悟して、生きる上で大切な知恵を捧げる事が重要なんだ。学校では、その役割を教師が担ってる訳だが、皆、日常の業務に追われ、その本来の意義を失ってしまっている事が多い。だから、そこをまた、親がフォローする必要があるんだ。

ここはどう言ってやれるのだろうか。しばらく考えた後、父は、「やめるかどうかは最後には走翔自身が決める事だし、その答えをお父さんは尊重する。ただ、一つだけアドバイスできるとしたら、お前は決してビリじゃない。それは今、お前はちゃんと走ってるからだ。一方で走りもしない人がどれだけいる事か？本当の『ビリ』はその中にこそいるんじゃないか？」それだけ言うと「後はお前が考える事だ」そう言った。

第2部

1．眠れない日々

結局、走翔は部活を続けた。『頑張ればその内必ず良くなる』走翔は必死に自分に言い聞かせていた。しかし、このストレスが次第に走翔を追い詰める事になる。走翔は眠れない日々を送り続けていた。中学生になってからは、部屋を与えられていたが、それでも親に気付かれないよう、夜通し起きてる事はかなりの苦痛だった。ベッドの上でじっと寝付くまで目を瞑る。そうしたら、走馬灯のようにこれまでの嫌な出来事が脳裏に蘇って来る。それを、振り払うかのように、固く目を閉じれば閉じる程、ますます寝付けなくなる。という悪循環の繰り返しだった。

それでも、その内うとうとし、寝てるような寝てないような状態の時は、必ず現実か幻想かわからないような悪い夢を見た。そして、そのまま朝を迎え、学校へ行く時間になってもボーっとして、何もする気も起らず、授業で必ず居眠り、しょっちゅう先生に怒られるという始末だった。だからその内、部活だけでなく、クラスの仲間からも疎まれるようになった。そのようにして、走翔は、学校でますます孤立して行った。

そんな中でも、好太だけは友達だった。クラスは違ったけど、休み時間とかには時々会ってた。二人とも、部活ではいつも「やられ」てたけど、お互い励まし合って、『一人じゃない』と思えるだけで勇気が持てた。そして部活のない雨の休日には、また二人で映画とか、ゲームセンターに行ったりして遊んだ。時には帰りにお互いの家に寄って、一緒にマンガを読んだりゲームをしたりした事もあった。だから、親同士も既に知り合う仲になっていったし、彼の存在だけが、今の走翔の支えであり、それは好太にも同じ事が言えた。走翔は、好太とは唯一、無二の親友だと信じて疑わなかった。

そして、12月24日。その日はクリスマスイブでもあり、2学期の終業式でもあった。走翔はホームルームが終わり、足早にみんなとは逆に、校庭

に向かっていた。今日は部活はないが、好太と部室で待ち合せるためだ。実は、11月から好太と約束していた事があり、それは、お互いに好きなゲームをクリスマスに交換しようという事だった。走翔のかばんの中には、一番のお気に入りのゲームソフトが入っていて、それを好太にあげる替わりに、好太のそれをもらう事で、お互いの友情を確かめ合おうという事だった。もし、万が一誰かに見られたとしても、部室なら二人とも怪しまれる事はない。用具の手入れをしていたとでも言えばいいからだ。

走翔は部室の前に着いた。ドアは閉まっていたが「好太」と声を掛けてみた。「走翔か」好太の声が返って来た。『いた！』走翔は表情を緩ませドアを開けた瞬間、今度は逆に顔を強張らせた。「よう走翔、また会ったな」そこには好太とそれを取り囲むように、陸上部の上級生が数人取り囲んでいた。走翔が、引き帰そうと振り返った時、後ろにも別の上級生が来ていて、部室の中に突き飛ばされ、ドアを閉められた。「実はな。好太にクリスマスプレゼントを頼んだら、今日、お前がそれを持ってくるって言ったんで待ってたんだよ」「なあ、早く見せてくれよ。そのプレゼント」走翔は何も答えなかった。いや答えられなかった。走翔の頭の中には好太にまで裏切られ、売られた絶望感で一杯だった。自然と走翔の目から涙があふれ出た。「ごめん、走翔」好太の声がしたが、そんなものは何のなぐさめにもならなかった。走翔は、その哀しみと屈辱に、もはや耐える力は持てなかった。意を決してその場を立ち去ろうとした瞬間、一人の上級生に足を掛けられ、そのまま頭から転倒した。走翔の額からは血が流れ、意識がもうろうとなったが、そんな事は気にも止めず、上級生は走翔のかばんの中をあさり、「あるじゃねーかよ。これもらっとくね。ありがとさん」と言って、好太に行くぞと声を掛けた後、「それともう一つ、好太もこれからは、俺たちの仲間になったからな」と言い残して出て行った。

2. 学校へ行きたくない

走翔は思い悩んでいた。『どうして自分はこんな目に合うんだろう？何か自分に嫌われる原因があるんじゃないか？』人に対する憎悪や失望は、次第に自分に対する憎悪や失望に変わって行った。

慢性的な不眠は食欲不振と体力減退を生み、冬休みに入ってから、不規則な生活や昼夜逆転の生活が続いた。それでも、走翔は親の前ではできるだけ平常心を見せるように振る舞い。両親は、まだ思春期にありがちな悩み。という判断をするしかなかった。しかし、正月を迎えても同じ状態が続き、無気力な態度が気になり、とにかく、学校が始まる時にどうするかだと考えてた矢先に、走翔が「もう学校へ行きたくない」と、父母に訴えた。三学期の始まる2日前の事だ。

『そうか、いよいよそこまで来たか』両親はいくらかは覚悟をしてはいたが、それだけは許すまいという思いで、必死に説得を試みた。

「どうしたんだ？」「何があったのか？」「いじめられてるのか？」「どこか身体が悪いのか？」いくら聞いてもそれにはまともに答えず、「困った事があるなら一緒に解決しよう」「何も言わなきゃ分からないよ」「勉強ができないと結局自分が損をするだけだ」と何とか説き伏せて、始業式の前日に何とか「分かった」と納得させる事ができた。

しかし、それは単なる願望の思い込みだったという事を思い知らされる。当日の朝、父は早番出勤のため朝早く家を出た。母に「あとは頼んだ。何かあればすぐに携帯に掛けて」と言い残した。母もパートの勤めがあったが、なかなか起きて来ない走翔を無理矢理ベッドから叩き起こして、早く着替えるよう厳しく言った。パート先には少し遅れる事を連絡した後、何とか出掛けられるようになると、走翔を引っ張り出すようつれ出し、玄関に鍵を掛けた。「じゃ、お母さん仕事に行くから、今日は、お父さんが早く帰るから鍵は持って行くよ。部活あるんでしょ。じゃ早く行きなさい」と、とぼとぼと歩く走翔の後ろ姿に気にはなりながらも、母は仕方なく、反対の方向

に自転車を走らせた。

それからだ。母は、パート先で仕事を始めて間もなく、そこに掛って来た学校からの電話を受け取った。「え？まだ学校に行ってません？」それは担任からの電話だった。「はい、ぎりぎりにはなりましたけど、学校に向かわせました。そうですか。分かりました。では、すぐ家に戻ってからそちらに伺います。はい、どうもすいませんでした」母は受話器を置くと店の責任者に「すいません。子供が今日学校に行ってないそうで、申し訳ありませんが早退させて下さい」と頼んだ。店の人は「あ、そう？それは心配だね。早く行ってあげな。明日ももし、難しければ休んでいいからね」と優しく言ってくれた。

母は足早に着替えを済ませ家に戻った。そこは朝出掛けた時と全く変らない状態で、走翔が戻った気配はなかった。もちろん、そうならないように鍵を持たせなかったので、当り前の事ではあったのだが。母は気を取り直しすぐへ学校に向った。担任に会うと「実は・・・」と、２日前に学校に行かないと言い出した件を話した。「そうでしたか？実は私も昨年から、だいぶん走翔君の態度が変わって来たのを気になってまして、早い内にお話をしようと思ってたのですが、ま、とにかくそれは後にして、今は先に走翔君を探しましょう。お母さん、どこか行き先に心当りないですか？学校もできるだけの事をします」と、母を励ました。

他の先生方も何人か協力してもらい、手分けして探してもらう事になった。母は父にも連絡して、仕事を切り上げて掛けつけてもらった。近所のスーパーやゲームセンター、駅や橋の下など、気になる所は全部回って、確かめたが、どうしても走翔は見つからなかった。すぐに昼を過ぎ、さらに陽が傾いても手掛りは何もなかった。両親はいよいよ不安になり、警察に捜索願を出すしかないかと一度アパートに戻った時、ひょっこり走翔が建物の隙間から現れた。

3. 自分との闘い

「走翔、どこへ行ってたの？」母の甲高い声が響いた。「寝てた」小さく声が返ってきた。「寝てたってどこで？外でか？」「・・・」「寒いのに、こんな所で寝てたら風邪ひくでしょ。早く中に入り。」母は、走翔の背中を押すようにして家の中へ入れた。「今、お父さんも帰ってくるから。みんなで心配してずっと探してたんよ」走翔は、母がつけたストーブの前で無言のまま座っていた。「そうだね、学校にも連絡しておかないと。」そういうと母は電話器の方へ向った。しばらくして、電話で話す母の声がした。「はい、そうなんです。大変ご心配お掛けして申し訳ありません。ええ、もちろんです。明日は必ず行かせますから。この度はいろいろとありがとうございました」そう言うと、母は電話を切った。

走翔はドキドキしていた。心臓の鼓動の音が大きくなって耳に届いていた。『母さんたちはどうしても僕を学校に行かせる気だ』でも、絶対にそれだけはできなかった。

そして、父が帰ってきてからもその話は続いた。「どうして、今日、学校に行かなかったんだ」父は問い詰めるように聞いた。「昨日も行くって約束しただろう？何が問題なのかちゃんと言ってみ」僕が無言でいると、「中学生は学校へ行かなければならないの。義務教育だから。そのために問題があれば解決しないといけない。それは父さんたちの問題でもあるんだ」と、父は立て続けに僕に話した。

でも、そんな事は分かっていた。学校には行かないといけない。そうは思っても、それ以上に気持ちや身体が言う事をきかない。自分でもどうしようもない事だった。「学校へ行かなくていいのは病気の時ぐらいだ。それなら病院へ行かないとならない。そのどっちかになる。走翔はどっちだ？病気なのか、だったら病院へ行こう」と、父はさらに迫ってきた。『父さん、そんな事分からないよ。どこが具合悪いんだと言われても言えない。ただ行きたくても行けない。理由は分からない。それだけなんだ』走翔は心の

中で叫び続けた。「何もないんだな。だったら明日はちゃんと学校へ行こう。いいな」それで話は終わった。いっぱい、言いたい事はあったけど何も言えなかった。

部屋にいると母が、「ごはんできたよ」と、声を掛けて来た。「今、欲しくない」そう言うと、もう何も言わなかった。「落ち込んでる」とか「そっとしておこう」とか居間で父母が話してる声が聞こえたけど、別に気にはならなかった。また、いつも通り寝付けないのを、一人、ゲームをしてごまかしていた。

そのまま、夜中の12時を過ぎた頃、「まだ起きてるの？早く寝なさい。また、明日学校行けないでしょ！」と母が強く言ってきた。「もうゲームを止めなさい！」ってさらに強く言われたけど、そのまま続けていたら、「こんなのやってるからいつまでも寝られないんでしょ！」と言って突然取り上げられ、「もう捨ててしまいます。」と、ゴミ箱に投げ入れられた。走翔はとっさに「何をするんだ！僕のだろ!!」と、母にくって掛かると、「いやー！お父さん!!」と母が叫んだので、その声に寝ていた父が飛び起きて、「どうしたんだ!?」とあわてて中に割って入ってきた。

走翔は部屋のドアを『バタン！』と閉め、「もう放って置いて！僕に構わないで!!」と泣き叫ぶと、涙が延々と止まらなくなった。追いかけて走翔の部屋に入ろうとする母を父が制止し、「これ以上追い詰めてはいけない。今日はここまでにして、また明日見守ろう」と言ったので、母もあきらめた。

その夜は親子三人が、それぞれ眠れない日を過した。『なぜ、こんな事になってしまったんだろう』と、三人が三人分傷付き、胸を痛めた。楽しかったあの日々、一緒に手をつなぎ、はしゃぎ、喜び、歌い。動物園、プロレスごっこ、誕生日、クリスマス会。あれは夢だったのか？もうあの日々は戻らないのか？

4. 学校との戦い

「走翔、起きてる？」母はいつものように走翔に声を掛けた。その声に気付いて、今度は遅番の父も起きて来た。「あなた、走翔がいくら呼んでも反応がないのよ。見て来てくれない？あの子、私だとまた怒り出すから」母は父に頼むと、「分かった」といってドアの取っ手に手をかけた。父は「入るぞ」と、言うとドアを開け、「まだ寝てるのか？」と言いながらベッドに近付いた。「おい、走翔。起きろ。学校行く時間だぞ」そう言って掛けぶとんをめくった。走翔は、そこに身体を横向きにして、腰を丸め、小さくなって横たわっていた。「おい、走翔。起きろ」きっと狸寝入だろうと思いつつ、肩を引いて仰向けにさせた瞬間、『これはまずい!!』と、一気に血の気が引くのを感じた。そこには青冷め、表情のない、薄目の開いた走翔がいた。「母さん、早く！早く救急車!!」と叫び、「走翔！大丈夫か！しっかりしろ!!」と走翔の頬を叩いた。「何、何があったの!!」と駆け寄る母に「走翔がおかしい！早く救急車を!!」と重ねて命じた。「は、はい。」と言って母は電話に向かった。「走翔！聞こえるか!?何か言え!!」父は声を掛け続けた。そして思い付いたように走翔の胸に自分の右耳を当て、「大丈夫だ、動いてる」と、自分に言い聞かせるようにつぶやいた。

走翔は、救急車が到着してからも目を覚まさなかった。「大丈夫です。心肺は正常です」の隊員の一言が大きな勇気と安心を与えた。「では、これから病院に搬送します。一緒に来られますか？」「はい、お願いします」と二人同時に答えた。病院へ着くまでの時間がとてつもなく長く感じられ、その間中、母はずっと走翔の手を握り、顔を見つめていた。「外傷もないようですし、恐らく大量服薬による昏睡状態でしょう。何か心当たりありますか？」隊員の説明に、「いいえ」としか答えようがなかった。「ま、後は病院に任せましょう」と、その隊員は励ますように父母に言った。

病院に着いて、処置室に運ばれてる途中に走翔は意識を取り戻した。「走翔、気付いたの？良かった」母は安堵して話しかけた。「一体何があっ

たんだ？」父が続けて走翔に尋ねた。走翔はしばらく目を閉じて考えた後、「薬を飲んだ」と一言だけ答え、またすぐに苦しそうに顔を歪めた。「すぐに胃の洗浄をします」と、医師は父母に説明した。

走翔は病室に入り、今は静かにベッドで横になっていた。症状はだいぶん落ち着いて、父母も正常心を取り戻していた。ただ、今回の事についてはあえて触れないようにし、「何か食べる？」とか「寒くない？」などと走翔に話しかけた。父は「もう大丈夫だな。じゃ僕は会社に向かうから」と母に言った。「はい、何かあったら連絡するから」と母は答えた。それから、しばらくすると母が、「学校の先生が病院に来られたみたいだから、お母さん会ってくるね。走翔は、まだ会わない方がいいでしょ」と言った。走翔が黙ってうなずくと、「じゃ、30分くらいで戻るから、何かあったらすぐそこの呼鈴を押して。看護師さんが来るから」と言い残して出て行った。

「先生どうも、わざわざすいません」母はまず、ロビーで会った先生に、申し訳なさそうにあいさつをした。「いいえ、それより走翔君の具合はどうなんですか？」と、先生も気遣って尋ねた。「ええ、ご心配をおかけしましてすいません。おかげ様でなんとか無事にしております」「それは安心しました。どうぞお大事に」「いえ、ありがとうございます」と母が礼を言うと、「早速なんですが先生、昨日おっしゃってた、学校で気になる事があったというのはどういう事なんでしょうか？」と続けて聞いた。「はあ、その件ですが今回の事と関係があるかどうか分からないんですが、部活の方で少し、いざこざがあったようです。それと授業の方では身が入らないようで、教科担任からの注意を受ける事が多かったようです」「そうでしたか。それは申し訳ありません」母はまず、無難に謝った。「いえいえ、何も走翔君が悪いと言う訳ではないんです」先生は恐縮して答えた。

これが、実はこれからの、学校との長い戦いの始まりになろうとは、まだだれも想像してなかった。

5. フリースクール

走翔の入院は、それから1週間続いた。主治医は「これもれっきとした自傷行為です。精神面に何か原因があるのかも知れません。しばらく、ここの児童心療内科に通わせたらいかがでしょうか？」と通院を勧めたので、父母は「ぜひ、お願いします」と、受け入れた。

走翔は、医師とのカウンセリングで、物心が付いた頃から人となじめなかった事、小学校の終わりに転校してから、その違和感が強まった事、中学校での部活でのいじめ、クラスでの疎外感、先生への不信感などが有った事を話した。「一度、学校ともきちんとお話し合いをされたらどうでしょうか？」とその担当医は父母にアドバイスした。

それから、担任との話し合いが持たれ、陸上部の顧問の先生に言って、ゲームを取った生徒に返させ、その保護者共に、謝罪してもらおうという事になった。それから、しばらくして何人かの生徒とその親が家に来たが、走翔は会いたがらず、走翔への謝罪と、取ったゲーム、そして手みやげを置いて帰った。母はその事を走翔に伝えたが、走翔は「今更遅い、謝っても許さない」とそれを拒否した。

まだ、解決されなかった事に、再び担任、今度は陸上部顧問との協議が持たれたが、原因の追求は、保健室登校、スクールカウンセラーの受診等の提案にすり替わっていった。母は、学校に行けない問題を、ずるずると『本人の都合』のように扱われていく事に違和感を覚え始めていた。母はそんな学校との状況を父に話し、父はそれならと、今度の協議には自分も出る事と、校長も出るよう要請する事を提案した。

「いじめがあった生徒とその保護者には、謝罪して頂きました。それ以上学校としては、どうする事もできません」と、もうあきらめたように校長は話した。「別に、犯人探しや、責任追及をしている訳ではありません。現実に一人の子が、学校に来られない状態が続いているんです。これをどうされるおつもりですか？」父がそれに対して問い返した。「ですから、以前より

保健室登校や、スクールカウンセラーを紹介してるんです」校長は同じ話を繰り返した。「いや、それだって、学校へ来れなきゃ出来ないでしょう？そんな時はどうするんですか？」父の質問は続く、「それを言われましても・・・・」校長は、それはそっちの問題だと言いたげだ。「なんでしたら適応指導教室や転校という選択もあります」校長がそう言った瞬間、「何て事を言うんですか！あなた仮にも学校管理者でしょう？それじゃ責任放棄じゃないですか!!」父は思わず声を荒げた。「あなた・・・」と言って母が父のひざに手を当てた。校長は下を向かいて黙っていたが、「いいですか？義務教育の義務って一体誰の義務ですか？子供の義務ですか？違うでしょ！私たち大人の、学校のこの社会の義務ではないのですか？子供に取ってはこれは権利なんです。あなた、教育のプロならそれぐらい分かるでしょ。だから僕たちはその義務を果たせてない事に悩んでるんです。心を痛めてるんです。それを何ですかあなたは？何も実感できてないじゃないですか？『気に入らないならよそ行け』などと・・・」「そうは言ってません」「言ったでしょ！同じ事でしょ。それでも教師ですか？あなた方はこれで生活してるんでしょ。だったらもっと問題の解決に本気で取り組もうとして下さい。臭いものに蓋ではなく、事なかれ主義ではなく・・・」父は失望感で全身から力を抜けるのを感じた。父母は、学校となかなか問題意識が共有できないという事を、カウンセリングの時に担当医に打ち明けた。そうしたら、一旦フリースクールを利用してみたらどうかと提案された。初めて聞いた所だが、こうなったら藁をも掴む想いで何でもやってみるしかないと思った。

6．自分探しの旅

そのフリースクールは、家から電車で4つ目の大きいターミナル駅から歩いて10分程の所にあった。そこの主催セミナーが次の日曜日にあると言う事で、走翔の父母はまずはどんなものかと二人で参加してみる事にした。会場は、100人程の席が並んでいたが、開始20分前には、もう既に満席の状態で、しかも受付には大勢の人が列をなしていた。「こういう所がこんな盛況だったらだめでしょう？」父は母に皮肉っぽく耳打ちした。

説明によると、フリースクールは、何らかの原因で普通の学校に行けない生徒が、自由参加で通う事ができ、そこで、学習や行事などを自分のペースやスタイルで行い、自分の進路を見つける事が目的の民間団体であるらしい。そして中には普通校と提携して、一定の基準により、学校登校と振り替える事ができ、進路や卒業が容易になるというものだった。

それなりに関心を持ち、それを家で走翔に話すと、やってみたいと希望があったので、入学の手続をする事にした。最初の一週間程は、母がパートの調整を付け送り迎えしたが、その内慣れて来ると、定期券を買って一人で電車通学するようにした。

最初走翔は、今日は何の勉強をした。今日はどこどこへ社会見学に行ったなど、その日の出来事を話したりして、ようやく自分の居場所を見い出したようだった。母も、スクールの親たちの集まりである父母会に、積極的に顔を出すようにし、勉強会や、情報交換会で交流を深めた。

しかし、そんな喜びもそう長くは続かなかった。ある日スクールから母のパート先に電話が入り、走翔が、そこで他の生徒とトラブルがあり、そのまま飛び出していなくなったとの事だった。母はすぐに駆け付け、置きっ放しの走翔の荷物を引き取り、家までの経路を注意しながら見て回ったが見当らず、とにかく家に戻ろうと帰った時には、走翔も既に帰っていて、部屋にいる様子だった。とにかく今日の事はあまり触れず、走翔もそれほど尾を引いてなさそうだったが、スクールはそれっ切り、もう行く事はなかっ

た。

母は父とも相談し、しばらくは様子を見る事にした上で、父は落ち着いたらちょっと旅でもさせてみようと、提案した。

それから、周りの生徒たちが春休みに入った頃、今時期なら子供が平日の昼間に外にいてもおかしくないだろうと、父は、会社から一週間休みをもらい、走翔に「父さんと北海道まで車で一緒に旅行に行くか」と誘った。それは、せっかくの機会だからいつか約束した母の故郷を見せてやりたいという事と、大自然を眼の当たりに何かを感じてくれればという期待があったからだ。「別にいいよ」と、いつも通りの気乗りのしない返事だが、走翔のそういう時は、結構積極的な場合が多いという事も父は知っていて、「よし、じゃそれで決まり」と、旅の計画はすぐに決定した。

父は、できるだけ走翔との話せる時間を多く取ろうと車とフェリーを使った。まずは関越道で新潟まで行き、そこからフェリーで小樽まで行く。そこから国道5号線を函館方面に南に進み、蘭越町に入ったらニセコ連山に向かい、その山中にある新見温泉に逗留する事になっていた。

母の実家は、そこからまた街の方に戻り、ニセコの方に向う途中にあるじゃがいもの畑作農家だったが、母の父が十年近く前に病気で亡くなってからは、後継ぎもなく離農し、空家となり、今は、母の母が札幌の母の兄家族と一緒に暮らしていた。走翔と父は、その新見温泉で3日程過ごし、帰りは苫小牧から太平洋航路のフェリーで戻る予定にしていた。

「よし、用意できたか？」父は走翔に声をかけた。「うん」いつものように短い返事が返って来た。「じゃ、行って来るから」父は、今度は母に声をかけた。「はい、気を付けて。もし、向こうで母達に会えたらよろしく」「うん、分かった」そして、走翔たちを乗せた車は出発した。

7. つかの間の休息

船は、その日の午後新潟港を出航し、翌日の午前中に小樽港に入港予定だった。新潟に着くまでの間、走翔は、助手席で横の窓にもたれたまま寝ていた。いや、たぶん半分起きてたであろう。その間に、彼は彼なりにこれからの不安な行く末を、あえて意識から遠ざけ、今は、このしばらくの時間をできるだけ平穏に過そうと願っているようだった。

春休みに入ったばかりの船の中はまだ空いていた。所々学生らしい若者が乗っていたが、広い船室はまだ十分に余裕はあり、走翔たちは、一番窓際のよく外の景色が見える場所に荷物を置いた。「じゃ、先に飯でも食べるか？」父が走翔に聞いた。「腹減った」走翔が返した。昼はとうに過ぎていた。二人は、母が持たせてくれたおにぎり弁当と貴重品を持って、テーブルのあるロビーに向った。

「体調はどうだ」父は、おにぎりを口に運びながら走翔に聞いた。「まあまあ」いつも通りのつれない返事だったが、これでもまだいいほうだった。「父さんは学生時代に、よくこの船に乗って北海道に行ったもんだ」「当時は母さんはまだ北海道にいたからな。付き合ってたから会いにな」走翔は黙っていた。「前にも言ったか？今回の旅は父さんにとってもその原点に帰る旅だ。時間はたっぷりあるからゆっくり行こうな」

それから二人は、船の中で風呂に入ったり、映画を見たり、たわいない話をして過ごした。そして船内に消灯を知らせるアナウンスが響いた。「じゃ、そろそろ寝るか？」二人は備えてある寝具を敷き、横になった。春の日本海の波はおだやかで、心地好い『揺れ』は自然と二人を眠りに誘い込んだ。

朝10時、定刻に船は小樽港に入港した。『寒い』走翔は初めて北海道の早春の風を感じた。「よし、ここから国道を南に進み、ニセコまで行ったら昼ごはんにしよう」父は走翔に向かって言った。「時間はどれ位？」走翔の質問に「ちょうど、2時間位かな」と答えた。途中の景色はもう4月とは

いえ、走翔が住む街のそれとは全然違い、道路こそ雪はないが、周りの山々はまだまっ白で雄大な大自然の風景が広がっていた。

「あれが羊蹄山だ」走翔は父が指差す方向を見た。「きれいだろ」そこには、富士山によく似た見事な円錐の山がそびえ立っていた。「どうだ。今度一緒に登るか？昔約束したよね。父さん一度登ってみたいと思ってたんだよな」「まだいいよ。その内」「そう？その内な。じゃ温泉入って、美味しいもの食べて、ゆっくりしよう。さあ、今日の昼ごはんの場所に着いた。ここのカレーがまた美味いんだよ」

「この辺はスキー場が多くて、昔から有名な所だから、全国、いや、今や世界中から滑りに来るんだ。今なんかはもう外人だらけで、5月の連休位まで滑れるんで外国みたいになるんだ。この店も実はカナダの人がやってるペンションで、ほら、だからここでも結構外人の人がいるだろ？父さんは昔この辺によく来たなあ。懐かしいな。そうだ。スキーをしよう。まだ、今でも十分できるんだ。父さんが教えてやるよ。楽しいぞ。」父は一人で話していたが、走翔も聞いてないようで、実はちゃんと聞いていた。それが、走翔にとっては結構楽なコミュニケーションの取り方である事を、父は良く知っていた。

「さあ、着いたよ。ここが新見本館。さすが山の中だけあって、まだ雪がたくさん残ってるな。ここの温泉がいいんだ、混浴の露天風呂があってな。明治時代から続く秘湯中の秘湯だ。お父さんも昔一度だけ来た時がある。日帰りだけど」「ようこそ、お待ちしておりました。この度は遠い所からありがとうございます。」若女将が最高の笑顔で迎えてくれた。「この度はお世話になります」と父が答えた。「どうぞお荷物をお持ちします。お部屋はこちらでございます」部屋に通され、館内の説明を受けた後、「ご夕食は18時でよろしいですか？どうぞごゆっくりお過ごし下さい」というと深々と頭を下げ戻って行った。「よし。じゃ、早速着替えたら風呂に行くか？雪見風呂だぞ、きっと。」と、父が言った。ここの温泉は2ヶ所あって、それぞれの違

ったお風呂が楽しめる上、露天風呂はかなり広く、ゆったりしていて、混浴だけど全く抵抗感がなく入る事ができる。周りはニセコ連山の森林に囲まれ、静かに風や鳥や動物の声を聞きながら、大自然を満喫するには最高のロケーションだった。

8. 数々の挫折

夕食は肉、野菜、魚。北海道の幸が盛り沢山だった。その上特別サービスとして毛蟹まで味わえて、走翔も満足の様子だった。父もすっかり上機嫌でお酒をもう1本追加した。それから毎日、温泉に入り、スキーをし、街に出掛け、二人は気ままに数日を過ごした。父は言いたい事もいろいろあったが、まずは『聞くより感じろ』で走翔の感性を信じて待つ事にした。その意味でここは最適な場所であった。

また気球にも乗った。空から見る景色はまた格別なものがあった。人間の一人一人が、この大自然の中にいると、とてもちっぽけなもののように思えた。

そして最終日。時間はあっという間に過ぎた。結局は札幌の母の家族には会えなかったけど、今の走翔なら、返って心配させるだけかもしれないし、何か目的を残して置いた方が、また来る機会になるからその方が良いのではとも思った。ただ、明日はいよいよ苫小牧港から帰路に着き、あさってからまた、これまでの日常に戻る事になる。少しでも、今日の旅が役に立てるようになればいいと思い、父は思い切って走翔に聞いてみた。

「走翔、いよいよ明日帰るけどどうだった？」「どうって？」「何か役に立ったか？」「うん、たぶん」「そうか。何が良かった？」「ごはんが美味しかった」「そうだ、美味しかったな」「他には？」「・・・」しばらく沈黙の時間が流れた。「また来たいか？」「どっちでも」「じゃ、来たいって事だな」父は冗談っぽく念を押した。「なあ、これから走翔はどうしたい？」「どうしたいって？」「何がしたい？」「考えた事ない」「このままでいいのか？」「・・・」「父さんはそれでもいいんだぞ。ずっと家にいたいならそれで、それは母さんも同じ意見だと思う」「・・・」「なあ、去年アメリカで乗っ取られた飛行機が、ビルに突っ込んで大勢の人が死んだ事件があったろう？しかも、一ヶ所じゃなく何ヶ所も。『世界同時多発テロ』って呼ばれてる。日本にいれば気付かないんだけど、世界にはまだまだ戦争が絶えず、多くの人が、攻撃や

飢えで命の危険にさらされている。そういう人からすれば、生きてる事だけで十分幸せな事なんだ。学校だの仕事だの、そんな事は本当はちっぽけな事なんだ。だから大切なのは、目の前の狭い範囲で物事を考えるのではなく、もっと広い視野で世界を見て、長い時間で何が必要かを考える事なんだ。分かるか？」

「僕は病気なんだ」ようやく走翔が口を開いた。「病気？何でそう思う？」「・・・皆んなと考え方違うし、合わせようとしてもできないし、近付いても避けられるし、嫌われる性格なんだと思う」「そうだとしたら今、何が必要なんだ？」「また、病院へ行きたい。今までフリースクールとか、家庭教師とかいろいろやってだめなのは、たぶん病気なんだからと思う。それが治らないと何をやってもだめだし、同じ事を繰り返すだけだと思う。」『はっきり言えるじゃないか？自分の事をそれだけ分析できる力があって、何が病気なものか？』と、父は心の中で思ったが、口には出さなかった。走翔はとことん挫折し切っていた。今、彼は絶望の淵に立っているのだ。彼が、その自己否定感、人間不信感から抜け出さない限り、失望から希望に変わる事はない。そして、その力は外から与える事ではなく、彼自身の内から湧き上がって来るのを待つしかないのである。『違う』『無駄だ』と分かっていても、敢えてそれを実行してみるしかないのだ。彼に今必要なのは、彼を歩かせる為の『追い風』ではなく、彼が歩こうとする力を湧かす『温もり』なのだから。

「よし、分かった。そしたら、家に戻ったら、ちゃんと病気を治せる病院を探そう」父は明るく答えた。

９．父の挑戦

走翔は、旅行から帰って来てからも、学校に戻る事はなかった。父母は長期戦になる事を覚悟していた。ただ、病院にだけは週２日通って、医師の診察と心理士のカウンセリングを受けていた。その日以外はほとんど部屋に籠りがちで、一日中ゲームやパソコンなどをして過ごした。それだけに、当然のように昼夜逆転して、食事も昼間に作り置きした時には手を付けず、夜、父母が寝てる間に、自分の部屋に持って行っては食べるという事の繰り返しだった。それでも病院に行く日だけは、たいがい午後からだが、昼には自分で起きて準備をし、シャワーを浴びて、一緒に出かける事ができていた。それは何よりも、彼が積極的に今の状態を改善しようとしている事の表れだった。

「もう一つ何かさせた方がいいと思うんだよな」父は、母に走翔にさらに取り組ませられるものがないか母に相談した。「英会話はどうかしら。あの子英語は好きだし、学校へ行かなくなってからでも、英会話教室へはしばらく行ってたくらいですから。もっともそこも、結局は友達に顔を合わすからとかで、行かなくなってしまったんだけれども」「そうだな。それもいいと思うけど、できれば何か体を動かす事の方がいいんだよな。ランニングはどうだろう？また朝、一緒に走らないだろうか？」「さあ、それはどうでしょうね。聞いてみないと何ともいえないのでは？」母は父の提案に半信半疑に答えた。「ま、次は僕が病院へつれて行く事になってる訳だし、その時にそれとなく聞いてみるよ」と、言ったものの、まともに言ってもたぶん『うん』と言わないだろうから、何か理由を考えなきゃと、言い聞かせた。

「ところでな走翔、父さん今も、『朝練』続けてる事は知ってるだろ？」父は病院の走翔をつれて行く途中、例の話を切り出した。「それで来年の１２月、前に走翔と約束したホノルルマラソンに出てみようと思うんだけどどう思う？」「え？どういう事？」「一緒に走ってみないか？」「無理！」一言で走翔の即答が返って来た。「だったら、せめて応援に来ないか？それだっ

たらいいだろ？」父は走翔の返事は想定内で、さらに次の質問が既に用意されていた。「考えとく」父は内心『いける』と感じた。それは、走翔がそういう時はたいがい、いい場合が多いからだ。「いいよ。じゃ考えといて」だから父はそれ以上言わなかった。「但し、できれば応援は大会の日だけじゃなくて、練習の時にも付き合ってくれたら嬉しいかな」「分かった」意外にも走翔の前向きな返事に、父はますます気を良くした。

「走翔、起きろ。今日から朝練付き合ってくれるんだろ」「もうちょっと待って」「だめ、早く。父さん会社遅れるから」父は、仕事が週三日ある遅番の日に、走翔と一緒に朝練をする事になった。渋々、走翔はベットから這い出し、着替えて部屋から出て来た。「よし、今日からお父さんホノルルマラソン完走に向けて練習開始だ。じゃ、今日は最初だからまず30分位走ろう」と言ってゆっくりと走り出した。

走翔もその後を、しかたなさそうに付いて走った。「走翔、『はやと』の『はや』は走るって字だ。走ると早いんで、父さんが当て字で考えた。そして『はやと』の『と』は翔けるって字だ。『とぶ』ともいう。ただの『飛ぶ』じゃない。鳥が大きく翼を広げて、飛び舞う姿を表わしてる。つまり野を駆け、空を舞い、勇敢に壮大に生きてほしい。そういう願いを込めて、母さんと考えて決めた。でもな、名前に負けちゃいけない。『名は体を表わす』という。走翔には本来、それにふさわしい力がちゃんとある。ただ、まだそれを見付けられずにいるだけだ。でも、焦る必要はない。人生は長い。このマラソンのように。最初に飛ばす者は、必ず最後には倒れる。自分の体力を知り、それに謙虚に従い、でも諦めず、最後まで走り続けた者だけがゴールできる。いいか。人生はマラソンレースと同じだ。今、飛ばす事を考えず、最後にゴールする事を目指せ」

初めて知った。自分の名前の意味を、走翔は噛み締めていた。父は涙を拭う走翔の姿を背中で感じた。

10. 父との別れ

それから三ヶ月の日々が過ぎた。父子の朝練はその後も続いたが、季節が春から夏になるにつれ、走翔はさぼる事が増えた。それでも週1、2回はなんとか起きて父のトレーニングに付き添って走った。父は、ホノルルマラソンまでに何度か実際の大会を体験するために、この7月、地元で行われるハーフマラソンに出場する事になっていた。

一方走翔は、中学2年から3年に進級するにあたって、校長面談を受けるために母と登校した。この半年、学校への出席日数は皆無なだけに最初は抵抗していたが、落第するのも嫌だったらしく最後にはあきらめた。そこで、夏休み中に各教科毎の問題の書かれたプリントを、家でやって出せば一学期は出席扱いにするという事だった。

そして今日、いよいよ父のデビュー戦。当初父から、母と応援に来てと誘われたが、スタートの後、2時間以上もゴールするまで待っているのもおっくうで、夏休みの宿題があるからと、それを口実に断った。それじゃ、と、父はウォーミングアップにもなるからと、会場まで自転車で出掛けて行く事にした。「じゃ、気をつけて」と、母と見送ると、「分かった、必ず完走して、メダルを持って帰って来るから」とガッツポーズをして走り出した父の後姿が、今思えば最後の姿となった。

それから約5時間後、昼食を終えて、もう帰って来るかと一息入れていたところへ電話が鳴った。父からかと思い受話器を取った母は、見る見る血の気が引き、青冷めていった。

とたんに「走翔！早く出て来て!!」と叫び声を上げたので、部屋にいた走翔が飛び出して来た。「お父さんが病院に運ばれたって。今、警察の人から。詳しい事は分からないの、すぐ病院に行くわよ」そう言われて、走翔も言う言葉もなく、すぐに着替えると、母の後から車に乗り込んだ。

「ご家族の方ですか？さあ、こちらへ」病院に着いて、促される様に案内されたのは病室ではなく、手術室の隣の待機室だった。そこにはストレッ

チャーの上で、顔に白い布をかぶせれらた父らしき人が寝かされていた。母が事態を飲み込めず茫然としていると、１人の男の人が母に近付き、「警察の者です」と告げ、「お顔を確認して頂けますか？」と聞いた。母が小さく頷くとその白い布が取られた。それは紛れもない父の顔だった。「ご主人ですか？」母はそれには答えず「あなた。どうして、なぜここにいるの？何があったの！返事をして。教えて頂戴!!」と叫んで、そのまま泣き崩れた。走翔はあまりにもショックで、声も出せずその場で立ちすくみ、瞬きもせず父の変わり果てた顔を見つめた。

「ご主人は、自転車を運転中、飛び出して来た何かを避けようとして転倒され、後から来た自動車に跳ねられました。救急車で病院に搬送される途中で心肺停止となり、隊員、医師共、懸命に蘇生を試みましたが回復せず、午後12時56分お亡くなりになりました。ご愁傷様です」

その、父の最期の様子を聞かされた瞬間、走翔の目にも涙が溢れ、とめどなく流れた。そして、父と過ごした小さい頃の出来事が走馬灯のように脳裏に浮んだ。初めてのキャンプで、降るような星空のきれいだった事、温泉に浸かりながら、一緒にアンパンマンの歌を歌ってくれた事、小学校の運動会で一緒に走ってくれた事、わかさぎ釣りに行って3匹しか釣れず、天ぷらにして1匹半づつ食べた事、花火をしてやけどした時、抱き抱えて病院まで走ってくれた事。

あの頃が走翔に取っては、これまでの人生の中で一番幸せな時だった。走翔が今、なんとか頑張ろうとしているのは、あの頃のような自分を、早く取り戻したいと思うからだった。

「こちらが、ご主人が事故に遭われた時に所持されてた物です。お確かめ下さい」と、差し出されたのは、父が、今朝、家を出る時に持って行ったリュックサックだった。走翔はその中から、着替え、タオルなどと共に、完走ゴールした者に与えられるメダルと『2時間8分』と書かれた記録証を見付けた。「おめでとう」走翔は、そう父に声を掛けるとまた涙が溢れ出た。

第3部

1．父のノート

父の通夜と葬儀から10日が過ぎた。初七日を終えても、母は、まだ現実を受け入れられない様子で、家は静まり返っていた。走翔も自分の事に加え、父までこんな事になってしまって、ますます出口の見えない暗闇の中でもがき、苦しんでいた。

「走翔、こんなものがあるよ」父の遺品を整理していた母が、走翔に一冊のノートを差し出した。「あ、そう。」走翔は気のない返事をした。「お前の事も書いてあるみたいよ、ここに置いとくから見とく？」そう言って母は、走翔の机の上に一冊のノートを置いていった。『何を今さら、そんなの見たってもう遅いんだ』走翔は、心の中で自分にそう吐き捨てた。

その夜も、走翔は眠れないでいた。ゲームもパソコンも全くやる気が起きなかった。しかたなく、昼間、母が置いていったその父のノートをそっと手にしてみた。中を開くとそれは、父が書いた日記だった。とは言っても、殆んどが走翔の事で綴られていた。日付はちょうど、走翔が学校に行かなくなった頃から始まっていた。

『2002年1月24日。日に日に弱くなって行くお前に。お前の不安は何か？お前の苦しみは何か？きっとお前が言うように“普通の人では分からない”のであろうか？父さんにできる事は何か？母さんにできる事はないのか？また、お前が言うように世の中は“生きにくい”所であるが、一方でお前が思っている程難しい所ではない。それをどうしたらお前に伝えられるのか？それをどうしたらお前が知る事ができるのか？今夜も考えてみよう』

『同年2月17日。今日は走翔と児童相談所へ行った。1月から申し込んで「やっと」という感じだったが、彼は思いの外話せたみたいで、職員の人とも仲良くなれたみたいだ。彼の中には、前向きな部分も確かにあって、何とかきっかけを掴んで、前に進む意欲を取り戻してほしい』

『同年3月3日。今日は走翔の13歳の誕生日だ。走翔おめでとう。彼の不登校は1月から続き、一進一退どころか徐々に悪くなっている。一体彼の中で何が起っているのか？どうなればいいのか？あれこれと、できる事は全てやっているが、どれも彼の心を掴むものではなかった。出口がまた、見えなくなってしまった。また次の何かを見付け出さなければ』

『同年3月24日。思い返せば走翔の自殺未遂事故から2ヶ月半が経った。その後、山あり、谷あり、様々な事にチャレンジし、また挫折し、今は適応指導教室に通い始めたばかりだ。週一回、正味一時間半程度だが、もし、ここからきっかけを掴み、立ち直っていけたらいいと思う。また、家庭教師は、今度新たな担当者に代わる事になっている。来月はいよいよ2年生、まだまだ時間があるし、全然大丈夫。自分を認めてやって行ければ必ずできる。さあ、北海道へ自分探しの旅に行こう！』

『同年4月10日。走翔、自分探しの旅はどうだった？何か見えたものはあったか？父さんには、お前が毎日いろんな事を悩み、苦しみ、どうしても薄れてしまいそうになる気力と戦いながら、精一杯生きようとしている姿はよく見えてるよ。本当は夢や、希望を持ち、多くの仲間と関わり、広がる世界を体全部で感じながら、胸を膨らませて生きてる時代なのに、お前からそれを奪った奴は一体誰なんだ？その責任がもし、この父さんに有ったとしても、父さんは最後まで、お前と生きていくし、守っていく。だからお前が考えた通り、やりたい通り生きればいい。お前には、既に他の誰も知らない貴重な経験がある。それは何物にも変えられないものだ。お前にはその事に自信を持って力強く生きて欲しい。それを父さんはずっと応援しているし、いつまでもお前の見方だ。だから決してお前の側から離れない。これだけは決して忘れないでほしい、走翔は本当に父さんの誇りだ』

2. カウンセリング

父のノートは、父が亡くなる前日まで続いていた。そこにも『走翔、じゃ行ってくるよ。そして必ずゴールする。その後はホノルルだ。お前と約束したそのレースを、今度は必ず父さんと走ろう』と、結んでいた。

「父さん、自分で言っておいて、もうその約束は果たせなくなってしまったじゃないか！」

走翔は、ノートを閉じると同時に涙を流した。それは一緒にホノルルマラソンに行けなくなった事ではなく、今まで父が、それほどまでに自分の事で悩み、苦しみ、もがいていた事にだった。『知らなかった。僕は自分の苦しみにしか気付かず、父にも同じ思いをさせてしまっていた』その事を思い知らされ、打ちひしがれていた。しかも、それでも走翔を見放すでもなく、逆に信じて、支えてくれようとしていた。その自責と後悔の念で一杯だった。

『それは、母さんもきっとそうに違いない』走翔にとってこれまでの事が痛たまれない気持ちになった。走翔は今更ながら、そんなかけがえのない父を失った事で、深い絶望の淵に立っていた。

そして、何日も脱力感だけの日々が過ぎ、走翔は久しぶりに、母と一緒に病院へカウンセリングに来ていた。「走翔君久しぶりね」ロビーで待っていると、担当の女性心理士の人が声を掛けた。「いつもお世話になっております。走翔の母です」と、走翔より早く、母が返事を返した。「いいえ、こちらこそ。この度は誠にご愁傷様でした」「どうもありがとうございます」「走翔君元気だった？」「はい」「そう、じゃ始める？」心理士はそう言って走翔を促し、母に、「では、お母さんはこちらでしばらくお待ち下さい」と声を掛け、母は「はい、分かりました。どうぞよろしくお願いします」と答えた。

走翔たちは『談話室』に入り、いつもの椅子に腰を掛けた。「走翔君、お父さんの事、大変だったね。本当にもう大丈夫なの？」「はい。何とか大丈夫です」「その後どう？もう落ち着いたかな？」「はい。あ、いいえ・・・」「あ

っ、ごめんなさい。先生あまりその話しはしない方がいいわよね」「いいえ・・・。そんな事ないです。大丈夫です」「ところで、お家の方ではどう。今はどんな風に過ごしているかな？」「ん～、毎日ボーっとしている感じ」「そうか、そうだよね」「学校の方はどう？何か連絡とか来ているの？」「前は先生とか来てたけど、今は全くなにもないです」「前っていつ頃？」「父さんが死んでからしばらく」「そうなんだね・・・」「ところで走翔君、これからどういう風にして行きたいと思う？」と、しばらく迷ってから、心理士は走翔に聞いた。

「これからって？」「そうね・・・。学校の事とか、将来の事とか？」「・・・。今は何も考えられない」走翔もしばらく考えてから答えた。「それもそうよね」心理士は思い直したように言った。そして、しばらく二人の沈黙が続いた後に、「先生、あのう・・・」と走翔が言いかけた。「何？走翔君。いいわよ。言ってごらん」と心理士に促され、少し迷った後に「実は・・・」と、思い切って父のノートの事を打ち明けた。「そう？そうだったの？」と心理士は走翔の胸の内を思わんばかりについ、もらい泣きをしてしまい、それを見て、走翔もつい堪え切れずに目を潤ませた。「先生分かるわ。最初お父さんが、走翔君をつれてこの病院に来られた時に、『僕自身もこれまでいろいろあって、その時には、走翔に嫌な思いも、哀しい思いもさせてしまったんだと思う。その時の心のほころびが、今、こうして走翔を苦しめているとしたら、それは僕たちの責任です。走翔は小さい時から辛抱強い頑張り屋だった。そして、優しさと思いやりを持っていた。そんな走翔の存在と成長が、僕たちが、苦しい時代にどれほどの支えになった事か、走翔がいなかったら、僕らもだめになっていたかも知れない。その事を気付かせてくれた走翔に感謝しているんです。だからこそ、今は僕たちが走翔を助ける番なんです。僕たちは、走翔の笑顔を取り戻すという、新しい目標が持てました。皮肉でなく、その事が本当に嬉しいんです。何としても走翔が、本来の自分を見付けられるよう、最後まで走翔を信じ続けます』っておっしゃ

ってたのよ。走翔は、また改めて知る父の話に体を震わせていた。

3. 運命の出合い

「母さん、僕、働くわ」母が、パートから帰って来て、夕飯の支度のために台所に立っていると、部屋から出て来た走翔が、ふいに声を掛けた。「えっ？働くってどういう事？」母は驚いて、振り向くなり走翔に返した。「仕事する事だよ」走翔が言うと、「そんな事は分かってる。ただ、学校はどうすんの？本当は勉強しないといけない立場よ。まして、中学生では働けない事になっているの。学校にも行けないのに、仕事なんてできる訳ないじゃない」と、母は呆れたように言った。「そんな事分かってるよ」今度は走翔が言い返した。「ただ、父さんも死んで生活も大変なんだろう。だから、自分の小遣いくらい自分で何とかする。週一回くらい午後だけなんだし、どうっていう事ないよ」それを聞いて、母は内心嬉しかった。何でも、少しでも自分でやる気になってくれた事は何よりだった。「そのバイトはどんな仕事なの？」と、母は尋ねた。「近くの工場の中で荷物を運んだり、整理したりする手伝い」「何でそこを知ったの？」「父さんの友達がやっている会社、前に父さんに誘われて一緒に行ったことがあって、その時にもバイトを勧められたんだけど、嫌だったからしなかった」「迷惑じゃないのかい。途中で投げ出したら困るんだよ」「いいや、好きな時に来て、好きな時に帰っていいって。まあ、気にしなくても大丈夫だから」『まぁ、何を偉そうに』と、母は内心思ったけど、「はい、はい、」と何だか頼もしくも思い、その声は少し涙声になっていた。

次の日、走翔は母が朝、パートに出掛ける前に作って置いてくれた朝食を、昼近くに起きて来て食べた。そして歯を磨いて、風呂に入って着替えると、一人でバイトに向った。工場では社長が近寄って来て、「おう走翔、来たか。まあ、無理しないで頑張ってくれな」と言って、走翔の肩をポンと叩いた。「よし。じゃ、早速ここの箱をその壁際に運んでもらうか。少し重いんでゆっくりな」走翔は社長から軍手を借り、言われた通り作業に取り掛かった。そこでは社員は二人いたが、どちらも工場の荷物をトラックで別

の所へ運ぶ仕事をしていて、荷物をトラックに積み込む時以外は一緒にいる事なく、広い工場で、普段は社長と走翔の二人だけで過ごす事が殆どだった。社長は、父と同じ年齢で、地元の中学校で同じクラスだったらしく、こっちに来て偶然再会したとの事だった。それ以来、父はちょくちょく、朝練の途中や休みの空いた時間にこの工場に立寄り、社長とこれまでの事や、仕事の事、将来の事なんかを話していたらしい。

走翔ともその後、作業の合間やバイトの終わった後、結構いろんな話をしてくれた。それはたいがい、ゲームやテレビや食べ物などの他愛のない事ばかりだったが、それが走翔にとっては、とても自然で緊張せず、落ち着いて過ごせる貴重な時間だった。

「走翔は、父さんの子供の頃の話って聞いた事あるか？」「いや、ないです」「そうか。おじさんも中学校からしか知らないが、気が小さく弱いやつでな。よく女の子に泣かされていた」「えー？そうだったんですか？」「まー、だいたいが父さんが先に意地悪するもんだから、その仕返しをされるんだが、いつもおじさんが、代わりに謝ってやって許してもらってた」「へー、情けないの」「そのくせ、反対におじさんが上級生にいじめられた時は、絶対敵わないのを分かって飛び掛かって行ったりしてくれた。案の定、二人ともボコボコにされてな。そんな風に走翔の父さんは、優しいんだけど、時々はめを外してよく失敗する。そんな人だったんだ。そんな風に人は皆、昔からできが悪いものなんだ。そんな中から挫折を重ねて段々と出来るようになっていく。だから、走翔も失敗を恐れるんじゃなく、その事で失うチャンスこそ恐れるべきだと思うな」走翔は最後には黙って聞いていた。父を今の自分と重ね合わせながら。

4. 自信への目覚め

走翔は、そんな社長との関わりを持ち続けるにつれ、次第に父のように慕うようになって行った。走翔のバイトはその後も続いた。しかも週一日が、二日、三日となり、午後半日が一日中に増えていった。そして、昼休みには社長との会話が続き、走翔は、社長とますます打ち解けるようになっていった。

「走翔は友達はいるのか？」ふいに社長が聞いてきた。普通だと走翔には、この手の質問は苦手だが、社長には、もうそんな違和感は感じなくなっていた。「今の中学校にはいない」走翔は正直に答えた。「そうか。じゃそれまではいたのか？」「いた」「どこにいるんだ？」「前の学校」「そうか。今、どうしてる？」「知らない。引越したから。」そう言って走翔はふと思った。『そうだ。そう言えば一平と愛美はどうしてるんだろうか？まだ、あの街に住んでいるのだろうか？それはそうだろ、あれからまだ二年とちょっとだ。変わるはずがない。あのまま、北野中に行って、普通の学校に通っているだろう』でも、走翔はそれが何年も経ったかのように感じていた。

走翔は『ハァー』と、ため息をついた。『それに比べ、一体僕は何をしているんだろう？なぜこうなってしまったんだろう？』走翔はまた、焦りと不安で胸がいっぱいになった。『会いたい。でも、彼らはもう、僕の事なんか忘れてしまっているだろうか？いや、そんなはずはない。今年の正月にも彼らから年賀状が来ていた。そこには、“走翔、元気か？今年は僕らも二年生。頑張って勉強して、あの約束必ず実現させような”と、書いてあった』当時の走翔はそれどころではなく、とても年賀状を出すような気にはなれなかったが、今思えば、このことがずいぶん悔まれた。

そこで、走翔は一つの言葉を振り返ってみた。『あの約束？そうだ！』引越しが決まった時、父としたあの話。そしてその後、一平と愛美は『ぜひそうしょう!!約束だからな。指切りしよう』と言ってくれた。僕も「おう！親友との誓いだ!!」と、胸が晴れ、幸せな気分になったのは、まだ二年前の事な

んだ。『ぜひ、会いたい。彼らも覚えているか確めたい。でも、そうなると今の僕の事も説明しなくちゃいけないな』走翔は、気の重い葛藤の中にいた。

「よし、走翔。1時だ。じゃ後半戦、また頑張って仕事やるか!?」と、社長が席を立つなり走翔に声を掛けた。「うん」走翔は一人考えていた間、あえてそっとしてくれた社長の気遣いが分かっていた。

走翔は次の週の始め、一人JRに乗り、以前住んでいた街に向かっていた。一時間半程のその車窓からは、少しずつ見覚えのある風景が見え、早る気持ちと緊張感で、走翔の胸は高鳴っていた。母には『今日もバイトだから』と言って置いた。余計な心配をさせたくなかったし、言われたくもなかったからだ。行き方はインターネットで調べ、電車の時刻から乗り換える駅から全て分かっていた。そして、いよいよ到着駅に近付くと、見慣れた景色が目に映った。『懐かしい！』走翔は心の中で声を上げた。時計の針はちょうど正午を指していた。『お腹減った』走翔は、朝から何も食べないでいたので、駅の立食いの店でそばを頼んだ。そこから歩いて20分程度行った所が、かつて走翔が住んでた家、さらに10分程行った所に通っていた北野小学校、そして北野中学校はそのすぐ先にあった。『走翔の家』まで来た時、急にその頃の思い出が、走馬灯のように走翔の脳裏に浮んだ。走翔はそこで、満面の笑みで一平たちと遊ぶ自分と再会した。そこには両方の手をつなぐ父母の姿もあった。走翔にはどれも、しばらくの間忘れていた光景ばかりだった。

『ちょっと早かったかな？』小学校の前で、体育の授業を受ける子供の姿を、自分と重ね合わせながら思った。それは、学校の終わる時間に合わせ、一平たちと再会しようと考えていたからだ。走翔はしばらく学校の前の公園で時間を潰す事にした。

5. 親友との再会

「一平」走翔は後ろから一平に声を掛けた。本当は、校門を出るところから知っていたんだけど、その時一平は、誰か走翔の知らない生徒と一緒だったので声を掛けづらく、しばらく、一平の後を付いて来たのだった。何だか、自分がストーカーみたいで変な気がしたけど、走翔にとってはそうするしか仕方なかった。

一平は、すぐに振り返って、しばらく走翔を見つめた後、「おうー、走翔！」と気付いて声を上げた。そして、走翔に近付き「久しぶりだなー。元気だったか？」と嬉しい顔で走翔の肩を軽く叩いた。「元気だ。愛美は？」走翔は直ぐに返事をして聞いてみた。「部活だ。テニスをやっている。二学期になって三年生が引退して、今後あいつがキャプテンになった」「へぇー。すごいじゃん。頑張ってんだなぁ、あいつ。一平は今日は部活なかったの？」「俺か？俺はやってない。帰宅部だ」一平は少しバツ悪そうに答えた。「いいねそれ、帰宅部」走翔は、場を繕うようにあいの手を入れた」「俺ん家来るか？まだ、誰も帰って来ないから」「いいのか？じゃ少しだけ」走翔は遠慮がちに言った。

「走翔の方はどうしてるの？今日、平日だろう？学校は？」一平の部屋に入って、早速一平は半分心配そうに聞いて来た。「いや、それが・・・」走翔はこれまでの事を一平に話した。そして、父が亡くなった事も。「そうだったんだ。大変だったな」そう言った後、一平も思い切ったように「実はな、俺の親父も今、入院してんだ。がんなんだ。もう3ヶ月になる。医者からは五分五分って言われてるんだ。それで、母さんが働きながら看病してて、家の用事はおれがやっているわけ。だから、部活も夏休みまではやってたんだけど、陸上だったんだ。でも、二学期から辞めたんだ。」「そうなんだ。一平も大変だな」走翔はそう言うのが精一杯だった。そして、一平と同じ陸上部だったという事に運命を感じた。さらに、同じように今は辞めたという事にも。二人はそのまま、しばらく沈黙を続けた。

「なあ、走翔。お前あの約束覚えているか？」何時間も経ったように感じていた時、ふいに、一平が走翔に尋ねた。走翔はドキッとした。まさにその事こそ、走翔が一平たちに会いに来た理由だったからだ。「もちろん憶えているよ。忘れるはずないよ。今日来たのもその事を話したかったからなんだ」走翔は、少し一平に嘘を付いた。本当はつい最近まで忘れていたからだ。しかし、一平はその事に疑いを持たず「そうだったんだ。同じ事を考えていたんだな。俺たちは離れていても親友だ」と、走翔に右手を差し出した。走翔も自分の右手を差し出し、二人は固い握手を交わした。走翔の胸には熱いものが込み上げ、涙ぐんだ。一平もそれを見てつられて泣いた。

「愛美はどうなの？」「愛美も同じさ。会うときにはいつもその話をしている。あいつも、走翔の事をあれからずっと忘れてはいないよ」二人は、変わらぬ友情に感謝して喜んだ。

「じゃあな。おじさん絶対良くなるよ。おばさんにもよろしくな」走翔は、一平に別れを告げた。「あっ、そうそう。愛美にもな」「ありがとう。分かったよ。でも、愛美のやつ、俺だけ走翔と会ったと知れば怒るだろうな？」「かもな。一平からも謝っといて。また来るって」「分かった。気を付けて帰れよ。おばさんによろしく」「おう、また絶対に来るから、その時は愛美と一緒に」「そうだな。それまで元気で」「そっちも元気で」と言って二人は別れた。走翔は今度こそ自分を取り戻せそうで、心地いい気分を感じていた。『よし、戻ったらもうしばらくバイトを頑張ろう』改めて自分に言い聞かせていた。

でも、次の日バイト先の工場の前で、走翔は呆然と立ち尽くした。冷たく閉じられたシャッターには小さな張紙があり、そこには、『都合により廃業致します。関係者の皆様には、大変ご迷惑をお掛けし申し訳ございません。』と書かれていた。

6. 会社がつぶれた

走翔は、事の事態を飲み込めないでいた。『どういう事だ一体。会社を止めたという事か？会社が潰れたという事か？』シャッターを引上げてみたが、びくとも動かなかった。誰かに聞こうとも、周りには誰も人影はなく、社員の名前も連絡先も知らない。走翔は、諦め切れない感じで、その辺りをうろ付いてみたが、何の手掛りもなかった。

仕方なく走翔は、家とは逆の方向へとぼとぼと歩き出した。『どうしてだ？なぜなんだ？どうして僕はいつもこんな事になるんだ。ようやくここまで来て、また、何かを掴めそうだったのに、いつもこうだ。僕は幸せになっちゃ駄目なのか!？』走翔にまた、絶望感が襲った。

『社長、一体どこに行っちゃったの？僕を残して。今までたくさん僕に話してくれたいろいろな事。その全てが僕を勇気付けてくれた。一つ一つは、何も難しい事ではないけれど、その大切な事を僕に分かり易く話してくれた。だから、僕は自然と受け入れる事ができたんだ。ある時言ったよね。

“生きるっていう事は、何も特別な事じゃない。生きにくいって言う事は、前に進んでいるからぶつかる壁だ。でもな、3Dの画像と同じで、おっかなそうに見えても進んで行けば、いつの間にかスルリと抜け出せるもんだ。ただ、また次の壁が向かってくるけどな。あははは。だから、人生なんてそのものが仮想ゲームみたいなもんだって思わないか？だから、なんだっていいんだよ。やられたって、すぐ甦る。心配しなくていい。怖いのは錯覚なんだ。ほら、ゲームって簡単に終わっちゃつまんないだろ。いろいろ難解な事があって、波乱万生に、長く遊べた方が面白いと思わないか？それと同じさ、楽しめばいいんだよ、人生を。そうすれば最後には必ず勝つ。ゲームと同じで。フィニッシュしないゲームはないよね”

あの時の話はほんとに目が覚めた。でもね。社長、ずるいよ。自分で言っておいて、続けなきゃだめじゃないか！困難な程、楽しまなきゃだめなんだろ！僕を置いて先に締めるなんて、ほんとずるいよ!!』走翔は、一人

河原の草むらに腰を降ろして叫んだ。でも、本当は社長を恨んでいなかった。それどころか同情すら憶えた。社長は、本当に一生懸命働いていた。朝早くから夜遅くまで、帳簿を付け、工場の作業をし、夜は営業に出掛けたりしていた。日曜日も休む間もなく働いていた。そして、何より優しかった。誰にでも親切だった。公私共に分け隔てがなかった。社員から『金を貸して』と言われれば、理由も聞かず貸してあげた。取引先から『ちょっとまけて』『しばらく待って』と言われれば、ふたつ返事でしてあげた。今、思えば、そうだからこそ駄目になったんだろうけど、本当は、そういう人を助ける社会でなければダメなんじゃないか。

走翔は、その歳で、まさに社会の矛盾と理不尽さを痛感し、正義がいつも勝つとは限らない現実に憤りを憶えた。

走翔が、とぼとぼと、家に帰って来た時はもうとっぷりと日が暮れていた。「走翔、お帰り、遅かったね。今日バイトだったの？残業？お腹空いたでしょう。今、ごはんだからちょっと待ってね」。そう言えば社長さんからお手紙届いてたわよ。机の上に置いてあるから。でも変ね。よく会うのにわざわざ手紙だなんて、今日会ったんでしょ。何もおっしゃってなかった・・・」もう、母の声は届いていなかった。走翔は自分の部屋に入るなり、すぐに社長の手紙を開けた。

『走翔、こんな事になって悪かった。君にさよならも言えず、それだけが心残りだ。でもな、いつか話した通り、人生はゲームだ、私はこれで終わるつもりはない。走翔は大丈夫だ。君は本当に頭のいい子だ。君は決して間違っていない。間違っているのは周りの方だ。そのまま行けばいい。風に吹かれようが、雨に打たれようが、その方が後の楽しみは大きい。だがな。それに役立つものが、やはり何と言っても知識だ。知識を持つものが最後には勝つ。ゲームだってそうだろう？やり方を知らなければいくらやっても勝てない。だから、どうにかして勉強する事。それが、私から今の君に送る言葉だ。今度はお互い復活してまた会おう。では、その時まで、

幸運を祈る』そこにはそう書いてあった。

7. 学校へ戻ろう

走翔は、社長の手紙を握り締めたまま、ベッドの上に顔を押し当てて泣いた。異変を感じた母が、走翔の部屋に飛び込んで来て、「走翔、どうしたの？一体何があったの？」と、叫んだ。母は走翔が手にしている『手紙』に目をやると、今度は「社長さんに何があったの？」と叫んだ。走翔が「会社がなくなった！」と言った切り泣き続けた。

母にはどうする事もできなかった。慰めようにも掛ける言葉が見当たらなかった。

これまで、度重なる困難に直面しては、少しずつ、ほんとに少しずつ乗り越えて来た。そしてまた、走翔の気持ちが良くなりつつあっただけに。母は走翔がふびんでならなかった。

その後年が明け、初春3月半ば過ぎになっていた。その間、走翔はいくらか平静を取り戻してはいたが、時々病院にカウセリングを受けに行く以外は、殆ど家に居て、ゲームばかりして過ごしていた。

「僕、学校に行くよ」ある日、母と静かに夕飯をとっていると、突然。走翔が、母に向かって言った。「えっ？何て？」母はあっけに取られて聞きなおした。「もう言った」走翔は、意地悪そうに返事をして、そして軽く微笑んだ。「今、学校へ行くって言ったかい」「聞こえてんじゃん」「学校ってどこの？」「決まってんだろ、中学校に」「ほんとかい。いつから？」「4月からだよ。だめなのかよ」走翔は、いつの間にかませた口の利き方になっていた。母は、その事にも走翔の成長を感じ、そう悪い気はしなかった。

「いいに決まってるじゃない」母は、慌てて肯定した。そして「じゃ。今度の校長先生と進級の面談のときに話しましょう。いいわね」「いいよ」走翔のぶっきら棒の返事が返って来た。ただ、その表情は穏やかだった。

それから、校長先生との進級面談に走翔は母と出掛けた。校長先生に母が話すと、「そうか。走翔君。それはよかった。君もお父さんが亡くなり、いろいろ大変だったのによく乗り越えたね。先生も嬉しいよ。もちろん進級

だ。おめでとう」と目を潤ませて言った。「ただ、先生はもうこの3月で学校を辞めるんだ。いやいや、何かあった訳ではない。定年退職だ。続けてやらないかと、他の先輩の先生方に言われたんだが、先生も考えたんだよ。今、もう60歳だ。あと、頑張って働いたとして10年位だろう。このまま学校に残るのがいいのか？それとも、何かまた別の事がやれるのか？その時にな、浮んだ顔が君、走翔君だった。君はこれまで、本当に辛い、悲しい思いをして過ごした。いや、それもまだ終わりじゃない。きっと、これからも続く事になるかも知れない。でも、先生はこれまで、何の力にもなれなかった。君とお父さんとお母さんに任せたままだった。そして、その大事なお父さんも亡くなった今、先生は、本当に申し訳ない気持ちで一杯だったんだよ。走翔君は、きっと先生や学校を恨むだろうと」走翔はもう、うつむいたまま肩を震わせて泣いていた。母も隣りでハンカチで目頭を押え、それを走翔に渡した。走翔はそれを持ったまま、自分の腕で涙を拭った。

そして校長の言葉は続いた。「そこで先生は考えたんだ。学校を辞めようと」「そんな先生」おどろいたように母が言った。「いや、お母さん。誤解されないで下さい。決して責任を取るためではありません。もちろん責任は痛感しておりますが、だからせめて、残された職業生活は、走翔君のような生徒のために残そうと。そのような子は、今、この日本にたくさんいます。そして皆、苦しんでいます。でも、決して子供たちの責任ではないんです。私たち、教員の、学校の責任なんです。その事がよく分かりました。そして、それを分からせてくれたのが、走翔君であり、お父さん、お母さんです。でもこのまま学校にいてはその事は叶いません。だからこそ、これからは学校の外で彼らの力になれる仕事をしよう。いや、しなければならないと考えているんです。」そして、別れ際に校長は苦笑いしながら「いや～、お母さん、いつかお父さんが言われましたよね。『義務教育とは子供の義務じゃない。大人の義務だ』と。あれは効きました」と、言った。走翔は校長と固い握手をした。

8. 父との約束

「ねえ、走翔。一つ聞いていい？どうしてまた学校に行こうと思ったの？」「いろいろ」走翔のぶっきら棒な返事は、実は、話しに乗ってるという事を母は既に知っていた。「いやね。もちろん、お母さんはとても嬉しいよ。だから何が良かったのか知りたいなあって思って」「・・・、約束したんだ。一平たちと。一緒の高校に行こうって」走翔はしばらく考えてから答えた。「あ、そうだったのね。それはいつ？引越しする前の時？」「それもあるけど、去年に行って来たんだ、一平の所に。それで、その時も聞いたら憶えてた。愛美には会えなかったけど、愛美も忘れてないって」「そんな事があったの？お母さん、全然分からなかったわ。走翔はいい友達持ってるね」

４月になって、新年度一学期の始業式があった。昨夜も母は、走翔に「ほんとに一緒に行かなくていいのか？」と、念を押したが、相変わらず「大丈夫」だと言うので、母は、朝見送った後、パートに出掛けた。学校へ着いて、まずクラス分け表が目に入った。走翔は、そこで自分の名前と、同時に剛志と好太の名前も見つけた。『嫌だな』走翔は一瞬顔を歪めた。教室に伺うまでは、うつむき加減に歩いていたせいか、知ってる顔と会う事も、声を掛けられる事もなかった。もっとも、最上級生になって、かつての上級生達は卒業しているし、下級生たちとは、今まで学校に通った事はないのだから、走翔の事がわかる生徒は同学年の一部の者だけという事になる。

それは、クラスに着いた時にはっきりした。既に剛志や好太を始め、何人もの『かつて』の顔が教室にあった。走翔の脳裏に嫌な思い出がよぎった。みんなは、振り向き様に『走翔』に視線を送ったが、すぐに向き直り、何事もなかった様に各々の話を続けた。走翔は一瞬立ち止まった後、黒板に書かれた一番後ろの窓際の自分の席に座った。

しばらくして、教室に入って来た担当の先生は、今年からこの学校に来たという新しい担任だった。担任は生徒の出欠を取った後、「では、これか

ら始業式に向かいます」と言って、体育館まで生徒たちをつれて行った。

その間、走翔は、名前を呼ばれた時に返事をした以外は、終始無言で、誰とも口をきかなかった。一度だけ、始業式に向かう途中に、好太が走翔に近付いて来て、「走翔、あの時はごめん」と、小さな声で話し掛けて来たが、走翔は、顔も向けずそのまま無視して前に歩いた。いや、決して好太の事が許せなかったのではない。そんな短い言葉の中に、好太の必死な勇気を、走翔はちゃんと分かっていた。しかし、もうその当時の事は、一切思い出したくないからだった。記憶が甦ると、その時の『ダメ』な自分を見なければならない。そうすれば、また苦しくなり、どんどんその世界に引き摺り戻されてしまうからだった。それは、何度も奈落に突き落とされては、這い上がった者しか分からない恐怖心だった。『好太、こちらこそごめんな。もういいよ。俺はなんとも思ってないから』走翔の心の中で答えた。

それでも、現実はなかなか走翔の思い通りにはならなかった。「おい、走翔、久しぶりだな。元気だったのか？」始業式の後、校門を出た所で、後ろからそう話し掛けて来たのは剛志だった。走翔が黙っていると、「まだ、俺の事怒っているか？」と聞いてきた。『放っておいても終わらないな』と感じた走翔は、まず、「別に」とだけ答えて様子を見た。「ほんとか？悪かった。いつかお前に会ったら言おうと思ってたんだ」走翔はほんとに何とも思ってなかった。そりゃ剛志には、いろいろ嫌な事は言われたけど、暴力を振るわれた訳でも、物を取られた訳でもなく、特に悪い奴じゃないって分っていた。「実はな、俺、今、陸上部のキャプテンやってたんだ。だから戻って来ないか？今度は、俺が必ずお前の事守ってやるから」でも、それだけでは絶対に嫌だった。剛志の気持ちは嬉しかったが、走翔にとっては、自分の人生を狂わせた元凶へ戻る事など考えられなかった。「ありがとう。でも断るよ。俺は俺でやっていく」実は走翔には、もう一つ心に決めた事があった。それはホノルルマラソンに出る事だった。そう、父との約束。それも果したかった。剛志に微笑み返した後、走翔は足早に家に向かった。

9. 母の故郷

「ハア、ハア」「母さーん。大丈夫？」「今、行くわ！よいしょ、よいしょ」その年の夏、走翔と母は、北海道の母の故郷を訪ね、故郷の山、羊蹄山を登っていた。そう、これもいつか、父が一緒に登ろうと言ってくれた事だった。父と登る事は叶わなかったが、今、こうして母と登る事ができたのは良かったと思った。

「あとどれ位？」「まだまだだよ。ほれ、ここ『5合目』って書いてある」「えー？まだ半分なの？ねえ、ちょっと休憩しない？」「分かった。じゃそこの岩の上で」二人は、他の登山者のじゃまにならないように腰を降ろし、リュックから水筒を出して飲んだ「あーあ、生き返った！」と母が本当に満足そうに声を上げた。「走翔、わたしね。実はこの山登るの初めてなんだ」「へー、そうなんだ？地元なのにね」走翔がからかうように言うと、母は「地元と言っても、お母さんの生まれた所は蘭越町、ここは真狩村。結構離れているのよ」と、言って頬を膨らませた。「とは言っても高校はこの近くだったんでしょ」「そうそう、倶知安ね。ローカル線で通っていたの。よく知ってるわね。誰に聞いたの？」「父さん。その時に、付き合い始めたんだって？」「お父さん、そんな事まで話したの？もう、嫌ねぇ」「まあまあ、それはともかく。そろそろ行こう」「じゃ、そうしましょう」走翔たちは、再び登り始めた。そして、それからさらに3時間半後、ようやく山頂の火山口に着いた。途中、母は何度も「やめよう」と言ったが、その度に走翔に励まされ、幸い天気も良かったので、何とか辿り着く事ができた。

そこから見る景色は素晴しく、雲は眼下に漂い、その切れ間からはニセコ連山や麓の町並みがジオラマのように広がって、まさに、地上からとは逆側の場所にいる事がよく分かった。「きれいね」母が、これまでのいろいろな事を、リセットするかのように言った。走翔も胸が熱くなるのを感じた。「そうだわ、走翔。お弁当食べよう！もうお昼よ」と、母がふいに言った時、時計はもう正午を指していた。「あーあ、腹減った！」と走翔はわざとらしく

声を上げた。

「走翔、ところでお母さんの実家は、もうここにはないのは知ってるわよね。そう、おじいちゃんが死んで、今、おばあちゃんは、札幌のおじちゃん、つまりお母さんのお兄さんね。その家で一緒に住んでるのよ。でもね、そこでの生活がおばあちゃんに合わないらしく、おばあちゃんが、こっちに帰りたいって最近言ってるらしい。でも、おじちゃんには仕事があるし、そういうわけにも行かないんだけど、かと言って、おばあちゃん一人で暮らすわけにも行かず、どうすればいいのか、みんな困ってるのよ」走翔は、今朝買って来たコンビニのおにぎりを頬張りながら、黙って聞いていた。

「それで、今、泊っているニセコのペンション、あそこはお母さんの親せきなのね。そこのオーナーに昨日聞いてみたんだけど、もし、どうしてもって言う時には、お母さんを働かせてくれるって言ってくれたのよ。お母さん、昔にもそのペンションで働いた事があって、その時にも助かったからって」

「それはいつの事？」走翔がおもむろに聞いた。「それはまだわからないわ。そうならないかも知れないし、おばあちゃんの状態とおじちゃんの仕事や、その家族の状況によるから。また、お母さんの今の仕事もあるし、少なくとも早いうちにはならないと思う。だからね、走翔は何も心配しなくてもいいのよ。これはお母さんたちの問題だし、走翔には迷惑は掛けない。高校も一平君との約束通り行っていいのよ。そうなれば、お母さんも走翔とこのまま暮らす事になるわ」

母は、少し動揺していた。『走翔の今後の状況を考えれば、まだ、話さない方が良かったのではないか？』そんな不安がよぎった。が、その時、走翔は「いいよ。そうなればなったで、母さんは僕に遠慮しないで引っ越せばいいよ。僕は僕で何とかなる。下宿でも寮でも入って、一平たちと同じ高校へ行く。心配しないで、一人ぼっちには慣れてるから」走翔はそう言って、母に屈託のない顔を向けた。

10. ラスト・ラン

母は、走翔の成長に喜びを感じていた。そして、北海道から戻ると、走翔のマラソン練習も本格的になって来た。4月にホノルルマラソンに行くって決めてから、インターネットで調べて、早期申込みだと安い事を知り、母に頼んで借りたお金で早速申し込んであった。その方が、気持ちも鈍らないし、練習にも身が入ると思ったからだ。実際その通りに役立った。

やはり、一人で練習すると言うのは大変な事で、学校から帰って、すぐ家から近くの公園の中を走って来るのだが、疲れやら空腹やらで、なかなか足が進まない。その内、だんだん暑くなって、もう30分も走ってられなくなり、登校前の『朝練』に切り替えたら、今度は眠くてもう起きられない。遅刻するだの雨が降ってるだの言ってると、週2、3回走るのがやっとの日々が続いた。それでも、走翔をやり続けさせたのは、父との約束、そしてもうあとには引けない状況だった。だが、本来フルマラソンに必要だと言われている1ヶ月200kmの走り込み目標には程遠く、どこかで、じっくり走れる方がいいと言う事で、夏には北海道につれてもらったのだった。そこでは、毎日存分に走ることができたが、やはり、まだまだ身体ができてなく、10kmも走るともうへばって走れなかった。それでも、部活を始めた頃、よく指導された事を思い出して、トレーニングを続けた。

また、登山も足腰を鍛えるには、非常に有効だと言う事が分かり、まだ暑い東京では、遠走の替わりに週末の度に山へ出掛けた。

秋になって、少し涼しくなって来ると、隅田川沿いを何周もして練習を重ねた。靴を何足も潰し、足のマメを何回も潰し、何度も筋肉痛に苦しみながらもなんとか頑張った。

そして当日、いよいよ出発の日を迎えた。「本当に一人で大丈夫？」母が心配そうに聞いた。「大丈夫だよ。だいたい大丈夫じゃないとして、どうしようもないだろ？アメリカなんだし」「それは、そうだけど」「じゃ、行ってくるから」「分かったわ、忘れ物ないわね」「ないって、チェックリストで何回も

見直したよ」「パスポートとお金、なくさないでね」「大丈夫だよ」「着いたら電話してよ」「はい、はい」そう言って走翔は、成田空港へ向った。

飛行機の中で、走翔はずっとこれまでの事を振り返っていた。『僕の人生はずいぶん遠回りしたけど、だからこそ気付いた事もたくさんあった。そして今、ようやくかつて父と約束したレースに出場するために、ハワイに向かっている。走翔は3年前とは奇跡的と言える今日のこの日を、多くの出会った人、多くの支えてもらった人に感謝した。そして静かに眼を閉じた。

２００３年１２月１３日早朝、走翔を乗せた飛行機は、ハワイホノルル国際空港に降り立った。ここは、５８年前の１２月７日、日本の真珠湾攻撃により、アメリカとの太平洋戦争が始まり、その後、終戦まで多くの人々が犠牲となった発端の場所でもあった。今、ここで多くの日本人が集まり、マラソン大会が行われようとしている事は、まさに平和そのものであった。走翔はチェックインを済ますと、早速街へ出て、コースの下見を兼ねて走った。初めて訪れるハワイ、いや、アメリカは何もかもが目を見張るものばかりだった。もっといろんな所を見て回りたかったが、翌日は深夜2時起床のため、今日はホテルに戻って早く寝る事にした。

翌朝午前4時半、辺りはまだ真っ暗だった。走翔は既にレースのスタート地点にいた。そして、その胸の高鳴りと緊張を、ストレッチやウォームアップで解きほぐそうとしていた。そして、午前5時と同時に号砲が鳴り響き、約三万人のランナー達が一斉にスタートして行った。

ホノルルマラソンは、ビーチ沿いの目抜き通りをほぼ往復して行われ、途中のダイヤモンドヘッドを除けば、ほぼ平坦なコースとも言える。

しかし、このダイヤモンドヘッドのピークが、約２３０ｍあり、前半はともかく後半は、一番苦しい場所となっている。走翔は焦らず、まずゆっくりめのスピードで、呼吸を整えるように走った。実はマラソンの場合、走り始めが一番しんどい時間でもある。なぜなら、今まで止まっていた所から走り出すわけだから、心臓に負担が掛かり易いからだ。“吸って、吸って、吐いて、

吐いて”走翔は呼吸でリズムをとりながら走っていた。

5kmを過ぎた頃、走翔は、いつものその辺りの時よりも楽に感じた。『大丈夫だ、行ける』と、自分に声を掛けた。東京の夏の練習の時より、低い気温のせいかも知れない。『いや、いくら12月とはいえここは南国、夜が明けたら必ず暑くなる。体力はできるだけ後半に残して置かないと』と、すぐに自分に言い聞かせた。

そして、10km地点、ここからいよいよダイヤモンドヘッドの登りが始まる。かつては『10kmの壁』として、走翔に立ちはだかった事もあったが、今はその後の練習の成果もあり、無難に乗り切ろうとしていた。そして、そのピークに差し掛かろうとした時、目の前の視界に、夜明け前の薄暗い空の下に静かな海と砂浜の風景が飛び込んで来た。それには、走翔だけではなく、ランナーの多くが見惚れ、気持ちを高揚させた。

下りは楽だった。走翔は、ここでつい欲を出してペースを上げた。これまで給水には一度も手を付けてなかった。しかし、これが良くなかった。練習では給水などなく、走り終わってからゆっくり喉を潤す事が多かったので、うっかり油断してしまったのだった。

走翔は、あわてて給水を取ったものの、案の定、坂を降りた後の20km過ぎでバテてしまった。ただ、まだ脚の方は大丈夫で、痛みなどは感じなかった。それから、こまめに給水を取るようにし、持って来た、飴やチョコを走りながら食べた事で、だいぶん体調を持ち直す事ができた。

ここから、高速道路を走るしばらくの道のりは、またリズムを取り戻すにはちょうど良かった。そして、日の出に照らされ、煌く珊瑚礁の海。映えるヤシの木と、白い砂浜のビーチ。どれもが、これまで見た事のない光景で、走翔の視線は忙しく動いた。そして、25km過ぎ、遂に折り返し。『よし』走翔は達成感と同時に気を引締め直した。

しかし、30km手前、走翔は未知のゾーンに入って来ると、さすがに体力の消耗を感じた。これからは、なだらかな登りが続き、そして、最後の

難関、ダイヤモンドヘッドだ。走翔は、痛み出した脚の苦痛に耐え、必死に走った。それでもペースは徐々に落ちて行く。『クソー！絶対に負けるか！死んでもゴールしてやる!!』最後は自分との闘いだった。

その時だった。「走翔、聞こえるか？走翔」突然、父の声を走翔は聞いた。「父さん」走翔は呼び掛けた。「そうだ。父さんだ。頑張れ、父さんが付いてるぞ。言っただろ、父さんはいつも走翔の味方だ。最後までお前のそばを離れないって。これまでも、ちゃんとお前の姿を見ていたぞ。よく頑張ったじゃないか？父さんは嬉しいよ。だから必ずゴールする事が出来る。最後まで一緒に走ろう。それが約束だったろ」「父さん、ありがとう。これまで僕を育ててくれて、僕は、父さんと母さんの子供で良かったと思ってるよ。でも、何で死んじゃったの？」「すまんな、走翔。二度とお前を悲しませないと言ってて、約束を守れなかった。でもな、父さんはいつもお前の心の中にいるよ。そして、いつまでも走翔と母さんの事を見ている」走翔は必死に涙を堪え、走っていた。脚の痛みは極度に達し、後は気力だけで走っていた。

「走翔、いいか、息を整えろ、そうだ、その調子だ。そして手を大きく振るんだ。いいぞ。自分が辛い時には、人の辛さを考えよう。そうすれば、『何をこれぐらい』って思えてくる。急ぐ事はない、ゆっくりでいいんだ。回り道だって、そこに何かがあるかも知れないじゃないか。お前は、これまでいっぱい苦しんだ。いっぱい傷付いた。だからこそ、人の痛みを知り、優しくもなれる。そして勇気を持つ事だってできるんだ。お前はもう立派な大人だ。人の何倍もの事を体験した。それを大切に活かせば、これからきっと、何でもできるはずだ。最後まで自分を信じて、諦めないでやり続けよう。そうすれば、必ずゴールできるから」走翔は、父の声をずっと耳にしながら走り続けた。レースは、いよいよ最後のクライマックス。ダイヤモンドヘッドに差し掛かった。登りは一層急になり、走翔の顔が歪んだ。すっかり陽が昇った風景は、行きのそれとはまた見違える程の一層の美しさを与えてい

たが、もう、それは走翔の眼には映らなかった。

「父さん、ありがとう。ここまで一緒に来てくれて、父さんの言う事、全部分かるよ。ここまで来たら、もう僕は大丈夫。心配しないで、これが、父さんと走る最後のマラソンだ、これからは、ちゃんと一人で走って行くよ。だから、父さん・・・」そこまで言って、走翔は声を詰まらせた。父の声はもうしなくなった。走翔の両眼は涙で前は何も見えなくなった。走翔は、両腕でそれを拭うとゴールに向かって両手を挙げた。　完

ラスト・ラン

2014年3月1日　初版発行

著者　北郷　遥斗（きたごう　はると）
本名　西田　雄二
京都府出身、北海道在住。
1963（昭和38）年11月4日生。
1988年立命館大学法学部卒。

出版　らんこし作家デビュー・プロジェクト